宍粟市

宇野構遺跡

— (砂)長水川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成27(2015)年3月

兵庫県教育委員会

宍粟市

宇野構遺跡

―（砂）長水川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成27（2015）年3月

兵庫県教育委員会

城跡遠景（南東から）

城跡全景（西から）

例　言

1　本書は、宍粟市山崎町宇野字構に所在する宇野構遺跡（うのがまといせき）の発掘調査報告書である。ただし、本報告では構名称としては宇野構を用いた。

2　本調査は、（砂）長水川通常砂防事業に伴うもので、兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体とし、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3　調査の推移

（発掘作業）

分布調査　平成23年４月14日（実働1日）
担当者：大平茂・久保弘幸
実施機関：兵庫県教育委員会
平成24年５月14日（実働1日）
担当者：久保弘幸
実施機関：兵庫県教育委員会

確認調査　平成24年７月４日（実働1日）
担当者：上田健太郎
実施機関：兵庫県教育委員会
平成24年７月31日（実働1日）
担当者：上田健太郎
実施機関：兵庫県教育委員会

本発掘調査　平成24年12月20日～25年３月25日（実働47日）
担当者：山上雅弘・田村唯史・永恵裕和
実施機関：兵庫県教育委員会
工事請負：山崎建設建材株式会社

（出土品整理作業）

平成26年4月1日～平成27年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4　本書の編集は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　菱田淳子が行い、執筆は兵庫県立考古博物館　山上雅弘が担当した。

5　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

6　本発掘調査において空中写真測量を、株式会社ジオテクノ関西に委託して実施した。

7　遺物の写真撮影については株式会社クレアチオに委託した。

8　調査成果の測量は、電子基準点：２級基準点　交２－K″３・基Ⅱ－R″１・基Ⅱ－R″２を用いた。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ⅴ系に属する。本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

9　発掘調査及び報告書の作成にあたっては下記の方々からご教示・ご協力を頂いた、記して感謝申し上げます。
金沢城郭研究所名誉館長　北垣聰一郎・城郭談話会　宮田逸民・同　高田徹・同　盛永耕三・伊水小学校校長　春名雅行・宍粟市歴史資料館館長　垣内章・同文化財調査員　片山昭悟

凡　例

1　遺物には通し番号を付した。ただし瓦類・石製品には、頭にそれぞれ瓦・Ｓをつけて、土器と区別している。

2　土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。
土師器：白抜き　／　陶器：黒塗り

3　土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1992年版　を使用した。

第１図　遺跡の位置

本文目次

第１章　調査の経過……1

第２章　地理的環境・歴史的環境……3

第３章　調査の成果……7

第４章　出土遺物……15

第５章　宇野構遺跡のまとめ……19

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版１　遺跡全景（航空写真）

巻頭写真図版２　遺跡遠景（航空写真）

表目次

第１表　石垣石材寸法表……13

第２表　遺物観察表……18

挿図目次

第１図　遺跡の位置……ii

第２図　現在の遺跡周辺（北西から）……1

第３図　現地説明会風景……2

第４図　伊水小学校生見学風景……2

第５図　作業風景……2

第６図　石垣作業風景……2

第７図　揖保川の船着場付近（南から）……3

第８図　山崎城紙屋門（東から）……4

第９図　揖保川から望む長水城址・篠ノ丸城址（東から）…4

第10図　篠ノ丸城址（南から）……4

第11図　五十波構址（南から）……4

第12図　周辺の遺跡……5

第13図　長水城址二の丸（南から）……6

第14図　長水城址と宇野構遺跡（南から）……6

第15図　宇野政頼公供養碑（南から）……6

第16図　五十波構址から望む長水城址（東から）…6

第17図　天守公園石碑……6

第18図　調査前の宇野構遺跡（西から）……19

第19図　兵庫県下の織豊期城郭……21

第20図　宇野構遺跡から殿町を望む（北から）……23

第21図　雪の伊水小学校と現場（北から）……24

図版目次

図版１　長水城址と宇野構遺跡
図版２　宇野構遺跡と殿町
図版３　宇野構遺跡全体図
図版４　調査区地形測量図
図版５　調査区全体図
図版６　石垣平面図
図版７　石垣石材配置図
図版８　西石垣１区　平・立面図
図版９　西石垣２区　平・立面図
図版10　西石垣３区　平・立面図
図版11　南・西石垣　断面図
図版12　西石垣　平・断面図
図版13　西石垣　平・断面図
図版14　出土土器
図版15　出土瓦１
図版16　出土瓦２
図版17　出土瓦３
図版18　出土磚
図版19　出土石製品１
図版20　出土石製品２

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景
写真図版２　遺跡遠景
写真図版３　遺跡全景
写真図版４　遺跡の旧状
写真図版５　調査区全景
写真図版６　調査区近景
写真図版７　調査区近景・石垣全景
写真図版８　石垣検出状況
写真図版９　石垣近景
写真図版10　石垣石材及び石垣構築状況１
写真図版11　石垣石材及び石垣構築状況２
写真図版12　石垣背面・グリ石状況
写真図版13　石垣断面１
写真図版14　石垣断面２
写真図版15　石垣断面３
写真図版16　石垣根切り痕跡
写真図版17　出土遺物
写真図版18　出土瓦１
写真図版19　出土瓦２
写真図版20　出土瓦３
写真図版21　出土磚
写真図版22　出土石製品

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所は山崎町宇野において（砂）長水川通常砂防事業を計画した。このため、平成23年度に分布調査（遺跡調査番号2011048）、平成24年度に分布調査（遺跡調査番号2012051および2012096）と確認調査（遺跡調査番号2012114）を実施した。この結果、宍粟市立伊水小学校（以下、伊水小学校）東側の小丘陵上に埋蔵文化財包蔵地の存在が認められるとともに、宍粟市教育委員会から当該地には長水城址の山麓居館の一つである宇野構遺跡が立地するとの教示を受けた。

以上の経緯から、平成24年９月11日西播（龍土）第271号において龍野土木事務所より依頼を受け、（公財）兵庫県まちづくり技術センターが本発掘調査（遺跡調査番号2012145）を実施した。なお、この発掘調査の調査期間は例言の通りで、調査面積は569㎡である。

このほか、遺跡調査に伴って、遺跡の測量を目的として航空測量を株式会社ジオテクノ関西に委託し、平成25年２月12日に実施した。

さらに、調査期間中に一般公開を目的として平成25年２月16日（土）に現地説明会を実施し、252名の参加を得た。この他、11月14日（水）（５・６年生35人）および２月27日（水）（４年生18人）に伊水小学校生の遺跡見学を受け入れており、地元の関心は非常に高いものがあった。

第２節　現場の調査

１．調査の方法

今回の調査は伊水小学校東背後の小丘陵について実施した。調査範囲は小丘陵頂部の西側と斜面および山裾にかけてである。現場の作業方法については、先ず人力で掘削を行い、遺構検出後（主として石垣）、検出遺構や調査区の状況について足場を用いて写真撮影をおこなった。さらに、個別の遺構ないし石垣などについては基本的に１／20縮尺の図面を作成した。このほか、全体図については航空測量を実施し、1／50縮尺の図を作成している。また、写真撮影にあたっては伊水小学校のご協力をいただいた。

２．現場の体制

本発掘調査

担当職員：山上雅弘（担当課長補佐）・田村唯史（臨時的任用職員）・永恵裕和（技術職員）

調査補助員：小谷義男　（肩書は調査当時）

請負業者：松本建設工業

測量委託：株式会社ジオテクノ関西

第２図　現在の遺跡周辺（北西から）

第３節　整理作業

１．調査内容

出土品整理事業は平成26年度に実施した。作業内容及び経過は次の通りである。

遺物の水洗い・ネーミング、接合・補強、実測・拓本・復元を実施し、その後、写真撮影および写真整理を実施した。これらに平行して図面補正・トレース・レイアウト・編集作業を行って報告書を刊行した。

２．調査体制

調査体制は以下のとおりである。

A作業　真子ふさ恵　荻野麻衣　嶺岡美見　上西淳子　沼田眞奈美

B作業　八木和子　古谷章子　高瀬敬子

第３図　現地説明会風景

第４図　伊水小学校生見学風景

第５図　作業風景

第６図　石垣作業風景

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

遺跡が立地する宍粟市は播磨北西部の山間地帯に位置し、市域の大半が揖保川の上流域にあたる。平成17年4月1日に宍粟郡山崎町・一宮町・波賀町・千種町が合併して宍粟市となったことにより、市域は安富町（姫路市に合併）を除く旧宍粟郡の全域に及ぶこととなった。

宍粟市北部の千メートル級の山稜に源を発する揖保川は、市域北部で引原川・染河内川と合流し、山崎町で伊沢川や音野川などが合流し、下流のたつの市を経て播磨灘に注いでいる。

宇野構遺跡は兵庫県宍粟市宇野字構および天子に所在する。城跡は揖保川の支流である伊沢川東岸の段丘上および丘陵上に位置する。伊沢川は上流部に石上神社が鎮座することで知られるが、流域延長15kmに及ぶ深い谷を形成する。この谷をかつては葛沢と呼び、明治時代には葛沢村が存在した。

宇野構遺跡は現在では宇野集落背後の伊水小学校の校庭となるが、この谷を流れる伊沢川は城跡周辺で谷中を塞ぐように大きく蛇行し、河床は水田面より５～６ｍ下がっている。このため宇野集落より南の水田は宇野集落からの引水ないし山からの引水に頼らざるをえない地形となっている。

第２節　歴史的環境

中世の山崎町南部は高家（こうげ）庄・柏野荘・石造荘などの荘園や播磨国衙別納の比地御祈保などがあった。さらに山崎の平地周辺のうち、揖保川東岸には条里遺構が点在して残されている。ただし、中世遺跡に関する顕著な発掘調査は極めて少ない。

集落遺跡では森ノ上遺跡で掘立柱建物２棟が検出されているほかは、宇原第４散布地で中世関係の成果が上がっている程度である。このほか、山岳寺院では長谷山遊鶴寺跡において発掘調査が行われ礎石建物基壇などが検出されている。

宍粟市山崎町周辺は、宇野氏の拠点として織豊政権の攻撃を受け戦乱を経たが、城跡や居館として知られる遺跡は多くない。宇野氏の拠点城郭である山城では長水城址・篠ノ丸城址があるが、このほかでは小規模な柏原城跡・聖山城跡が知られる程度である。

宇野構（本章では構名称として宇野構とした）の詰城である長水城址は標高584mの長水山山頂に位置する。この城は山頂の主郭から周囲の尾根に向けて多数の郭群で構成される大規模な山城である。篠ノ丸城址は山崎市街地の北背後にそびえる標高324.6mの山頂に立地する。主郭は方形を呈する居館的な郭で南西－北西にかけて大規模な連続する畝状空堀で防御する。柏原城跡は山崎市街の南西に聳える国見山山系に立地し、隣接して長谷山遊鶴寺跡がある。聖山城跡は揖保川東岸の標高166mの山頂に築かれた山城である。

第７図　揖保川の船着場付近（南から）

居館では長水城址の山麓居館とされる宇野構・五十波構址・清野構がある。五十波構は長水城址東麓に立地する。平野に突き出した舌状台地を利用して構築されたもので周囲を土塁が囲繞していたと思われるが、現在は北側に土塁・堀が残されるのみである。

宇野構は天正８年の秀吉による長水城攻めのときには宇野祐清が居館の主で、一方の五十波構は隠居した父の宇野政頼、清野構は宇野一族の宇野祐久の居館といわれている。また、長水城が本城であるが規模的にはこれに匹敵し発達した防御施設を持つ篠ノ丸城については政頼嫡男の光景の居城であったが、天正２年（７年との説もある）に父によって成敗され廃城となったといわれるのみである。ただし、天正２年段階で廃城になったとするには、構造的にみると無理があるので、その後も存続したと思われ、少なくとも天正８年までは機能したと考えられる。その後、宍粟郡は天正12年まで豊臣大名である神子田正治、天正15年までは黒田孝高、天正18年までは龍野を領した木下勝俊が拝領した。

近世には元和元年に宍粟藩が立藩し池田輝澄が鹿沢城を築城している。六軒町遺跡では武家屋敷に関連する建物や区画溝などが検出された。

引用文献

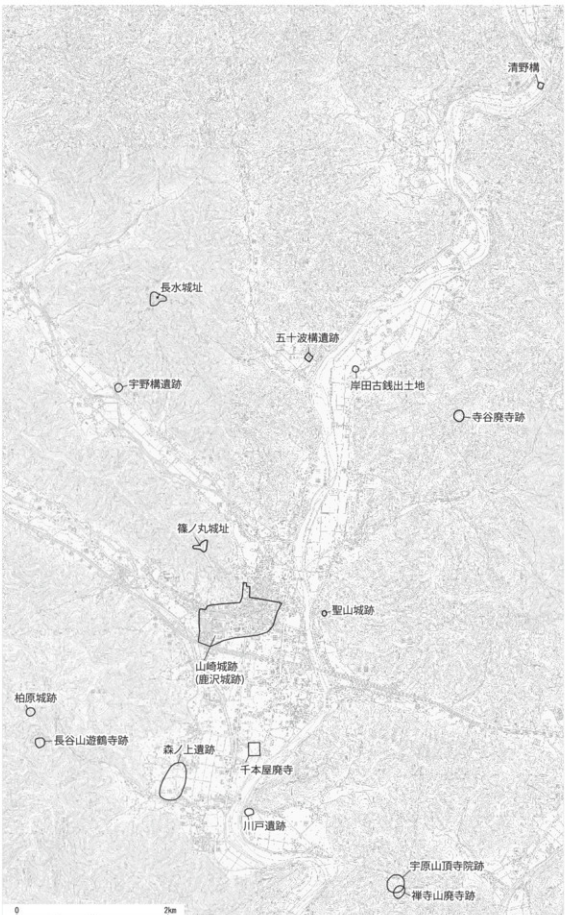
山崎町1977『山崎町史』
兵庫県教区委員会1982『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』
兵庫県教育委員会2013『神谷戒現行遺跡』
宍粟市教育委員会2009『長谷山遊鶴寺跡確認調査概要』
宍粟市教育委員会2011『宇原第４散布地発掘調査報告書』
宍粟市教区委員会2014『播磨国宍粟郡広瀬宇野氏の史料と研究』

第８図　山崎城紙屋門（東から）

第９図　揖保川から望む長水城址・篠ノ丸城址(東から)

第10図　篠ノ丸城址（南から）

第11図　五十波構址（南から）


清野構
長水城址
五十波構遺跡
宇野構遺跡
岸田古銭出土地
寺谷廃寺跡
篠ノ丸城址
聖山城跡
山崎城跡
(鹿沢城跡)
柏原城跡
長谷山遊鶴寺跡
森ノ上遺跡
千本屋廃寺
川戸遺跡
宇原山頂寺院跡
禅寺山廃寺跡
0
2km

第12図　周辺の遺跡

調査区周辺の景観と変遷

宇野構は、長水城址の麓の居館として伝わり、伊水小学校の校庭がその居館と伝承されてきた。今回の調査区は字では「天子」と呼ばれ、校庭は字「構」、周囲の集落は「殿町」と呼んだ。一方、現在の地区名である宇野は明治初年に上町村・中町村が合併して生まれた村名である。もともと「慶長国絵図」によれば構周辺は上町村に含まれ、寛文頃までに中町村が分村したもので、明治期に再び合併した。(平凡社1999「兵庫県の地名Ⅱ」) また、学校名である伊水は構の背後の谷地形を呼んだ可能性が高い。この谷は長水山から続く深い谷地形で麓集落への水源となり、城址への大手道でもあった。

第13図　長水城址二の丸（南から）

第14図　長水城址と宇野構遺跡（南から）

第15図　宇野政頼公供養碑（南から）

第16図　五十波構址から望む長水城址（東から）

宇野政頼公供養碑（第15図）：昭和初期に建立された供養碑で、ここにかつて宇野氏の居館があったことを、地元の人々が伝承していた証となる碑である。

天守公園の碑（第17図）：調査区南側の斜面から出土した石柱である。下部が折れた状態で出土したが、もとは小丘陵上にあったものと思われる。正面に「天守公園」、右側面に「大正十二学年度職員父兄建之」と刻まれる。同年は天守山が学校山となり、ここに奉安殿が建立され周辺を公園として整備した年にあたり、石碑はこれを記念して建てられた。また、この年には小学校の講堂が落成している。写真図版４上段には整備当時の状況が写されている。

第17図　天守公園石碑

第３章　調査の成果

１．調査地区について

調査区のある小丘陵は標高150m（比高12～13m）の高台に位置する。麓の伊水小学校校庭は標高138m、さらに小丘陵西麓で校舎北側の広場は一段低く（平成26年現在は小学校の駐車場に利用される）標高137mとなる。小丘陵頂部は平坦面で南北に細長い地形であるが、これに続く南側の尾根は傾斜地形になる。調査地点の現況は森林で、椚や銀杏などの樹木で覆われる樹林であった。調査前、斜面には部分的に石垣石材が露出していたものの、大半が埋没しており石垣を判別することはできない状態であった。一方、小丘陵頂部は平坦地であるが、後述する何度かの整備によって改変を受け、城郭構造については明確ではなかった。

構とされる伊水小学校は明治６年に玉峰小学校として開校し、明治33年には葛澤第一尋常高等小学校と改名した。（写真図版４）こののち、大正12年に講堂が落成し、同時に天守山が学校山となったとされる。第２章で紹介した石碑はこの時の整備を記念したものである。写真図版４上段の写真はその後の昭和12年のものである。そして、昭和16年に校名が伊水小学校となり現在に引き継がれている。

戦後の昭和46年には講堂の場所に体育館が竣工したが、この時東背後の小丘陵南側について尾根上の切り下げや周囲の若干の切り崩しが行われたものと思われる。昭和55年には現在の鉄筋校舎が完成し、昭和60年7月にフィールドアスレチック施設が整備されている。これによってわずかに見えていた石垣が埋没したと思われる。また、この時には写真図版４の下段にあるように、調査区の西山裾にあたる場所に、現在は西側へ移転している宍粟市立伊水幼稚園が建っている。この幼稚園の建設以前に土塁が幼稚園敷地の南端に、東西方向に残されていたという。（宍粟市教委 垣内章氏の御教示による。）さらに、平成21年には老朽化によりフィールドアスレチック施設が撤去され、周辺が現況の樹林に帰っていた。

２．小丘陵の郭と構（図版１～４、写真図版１～３）

今回の調査区である小丘陵は構の背後を遮断して守る土塁の役割と、居館の背後にあって詰め城的な機能との両面を持った郭と考えられる。また校舎北側の広場にかつて土塁が残されていたことからすると、構本体についても郭ごとの土塁区画が存在した可能性が高い。

一方、小丘陵は東側の谷地形に対しても高台となる。この谷地形には伊水川が流れ、上流は長水城址の山頂手前まで続く城址への大手道となる。このため、小丘陵は大手道側に対しても遮断機能を持つこととなり、守野構は独立した城郭として機能したことが推測される。なお、小丘陵背後の水田平坦地は武家屋敷と呼ばれ、登山道には門址と伝承する場所が言い伝えられるなど、地元には構とともに大手道についても城郭の一部とする意識が強い。

この小丘陵は北側から張り出した尾根地形であるが、校舎側（西側）に対しては現在岩盤が露出しており、校舎建設時の掘削によって切り崩されたと思われる。このため旧状はもう少し緩やかな斜面であった可能性や、前面に石垣が存在した可能性も残されるが、石材の遺存すらないので旧状は不明である。以上のとおり小丘陵頂部は郭として機能したことは確実であるが、近代以降の改変が進んだため、今回の調査では城郭に関連する遺構は石垣以外には検出することができなかった。

3．郭（図版４～６、写真図版５～７）

郭は小丘陵頂部に位置する平坦地である。規模は南北40m、東西12～15m、面積500㎡ほどで、南北に細長い地形を取り込んで構築され、北側には現在、宇野政頼公供養碑（調査区外）が建つ。ただし、平坦面の大半では表土下10～15cm前後で岩盤層が検出され、包含層や遺構、遺物は残されない。このため全体が岩盤層まで切り下げられ、遺構面が失われたものと思われる。一方、郭西端では黄色砂質土が盛土され、後述する石垣裏込土の上面を覆う状況が観察された。この盛土は汚れがなく均質な山砂であることからアスレチック整備時の客土と推測される。

郭の南端は南石垣によって区画される。そして、南側（小丘陵頂部の南側）へはさらに尾根が伸びて西側の構本体を遮断するので、郭同様に構の東側を防御したと思われる。しかし、地形的には傾斜地形となり、表土下10～50cm前後で岩盤層が検出され、表土から多数の近代遺物が出土した。調査前の状況もガードレールや丸太、長方形石材（切石）によって階段が設置され、この階段の石材として第２章で述べた「天守公園」の石碑（第17図）が転用されるなどしていた。これに対して、写真図版４上段の写真では昭和12年頃は南側に続く尾根筋が現在のような傾斜地形ではなく平坦で、南側へ急激に下がっている印象はない。このため郭同様にアスレチック施設整備時（あるいは体育館建設時）に切り下げが行われたものと考えられる。さらに、南側傾斜面の端および西側斜面は全体が崖地形で、小学校校庭と隔絶するが、これについても人為的な掘削が推測される。

一方、昭和12年の写真（写真図版４）を見ると郭南端の南石垣周辺に奉安殿が建つ。板屋根の建物で、建物周囲を玉垣で囲っている姿が確認できる。調査では奉安殿の建物痕跡は検出できなかったが、土台となった根固め石と盛土は南石垣東側に検出されたので、その位置は概ね知ることができる。

また、調査区外であるが郭北端は鞍部地形となる。この地点では郭面からは1.5m前後低くなるが、鞍部の地表面に岩盤が露出するため、旧状も現状以上に深くないと推測される。このため堀切などの防御施設と考えるには不十分である。さらに、この部分に石垣が存在したとしても、高さが確保できるわけではないので、高さ1.5mほどの簡易なものと言わざるをえない。ただ、状況からみてこの部分が区画となり、郭の北端を限っていることは確実と思われる。一方、郭の北縁郭側は鞍部地形に対応して高さ50cmほどの土塁状の隆起地形を呈する。ただし、頂部平坦地が近代以降に岩盤層まで削平されている事実を踏まえると、この削平の及ばなかった範囲とも考えられるため、これを土塁地形と解釈するかどうかは、今後発掘調査などによって結論付ける必要がある。

4．石垣（図版６・７、写真図版８～16）

石垣は小丘陵頂部の南側と西側で検出された。南側の石垣を南石垣、西側の石垣を西石垣とし、記述の都合上、西石垣を南側から３区に分けそれぞれ１区・２区・３区とした。このほか調査区外になるが、小丘陵西斜面の北端でも西石垣の延長と推定される石垣が検出されており、これを西石垣北区とした。石垣の規模は南石垣が長さ3.5m、最大の高さが0.5m前後、西石垣１～３区が長さ35m、高さは0.5～0.8m、西石垣北区が長さ6.7m、高さ0.5m前後である。なお、西石垣１区南から13.2～15.2mと19.8～22.5mの区間、石垣が崩壊して途切れてしまう。このことから西石垣では南側から最初の途切れ部までを1区、2か所の途切れ部の間を２区、北側を３区とした。１区には石１～石35、２区には石１～石13、３区には石１～石28がそれぞれ残され、合計76石の石材が検出された。南石垣では隅部の石材を除くと石１～石８の８

石、西石垣北区では石１～石８の８石の石材が残されていた。

【石垣の構築】（図版６～13、写真図版６～16）

石材は最も残されているところで西石垣２区の３段があるが、他の地点では１段ないし２段であった。西石垣１区は大半が２段で、同３区については部分的に２段となっていた。石垣の下端は西石垣１・２区では小丘陵頂部の郭面から３m下に基底石が据えられ、その背面にはグリ石が多量に検出された。ただ、グリ石は残された石垣背後のみならず法面全体に検出されている。このため元々は全面に石垣が存在したことが推測され、かつては基底石から郭面まで石垣が存在していた可能性が高い。このことを前提とすると、石垣は最大で高さ３m前後（西石垣１区）あったことが推測される。

西石垣と南石垣の隅角部はやや鋭角気味であるが、基本的に矩形と評価できる。また、西石垣２区の石10～12は１石分ほどの小規模な入角をもつ。さらに、３区北側（石1～17）では石面（25）を曲線に構築する。そして、西石垣３区と西石垣北区の間では半間ほどの入角となり（この箇所はアスレチック整備時の通路の造成によって破壊される）、西石垣３区内側に折れる格好となる。なお、西石垣３区で基底石の据え付けレベルは147.0mと高くなるが、西石垣北区の南側で148.2m、北側で147.6mとさらに高くなる。そして、西石垣北区では郭面との高低差は2.5m前後を測る。従って、西石垣南側で３mであった石垣は北側に行くほど基底部が上がるため、逆に低くなると推定される。

石垣技法はいわゆる野面積み石垣で、矢穴が残る石材はない。石材は自然面を残し表面が風化を見せ、割れや折損も多く見受けられる。石垣構築にあたっては根切りが行われており、岩盤をＬ字状に掘削して基底石を安定的に乗せる場所を確保する。石垣の小面は打ち欠きやノミなどによる調整は行わないものの、自然面で比較的平滑な面を表側に使い、そろえる意識が認められる。たとえば石29は小面（24）を石垣面に出すため、控えが不定形となる。このために控えを斜めに据えて納めている。さらに、現状では失われているが、控えの短い間詰め石を石33との間に入れざるをえなくなっている。

石垣は角礫の自然石を用い、石材を横位に据え、控えを長く取る特徴をもつ。石垣の断面には法（07）がわずかに取られるが、上部が残らないので全体的な様相は残存部からは不明とせざるをえない。このほか築石の空隙は多く、間には間詰石が顕著である。さらに角石・基底石・築石共にカイ石を豊富に用いて石材の安定に注意が払われている。石の積み方は面（24）側では横方向を意識して積んでいる。一方、控えは石材の最大長辺（長手）を用い、石材の尻をやや低く据える傾向を持つ。この据え付けのためにも基底石にはカイ石を多く置いていた。ただし、西石垣３区では石面を曲線に構築する箇所が認められ、石垣そのものの高さも減じていることから、一見雑な積み方という印象を持つ。グリ石は長軸70～80㎝大のものや長軸１m前後の大型の石材も混じっており、石垣面の築石とほぼ同規模のものが含まれる。これらの諸特徴は、播磨の中世山城に確認されるものではなく、織豊系城郭の石垣技法に見られるもので、播磨では天正８年以降のものと判断される。

【南石垣】（図版６・７・11、写真図版７・８・11）

南石垣は曲輪の南面を限る石垣である。ただし、奉安殿が建てられたことにより大部分が壊されていたようで、残されるのは西側の一部のみである。南石垣で残存している築石は８石（石１～石８）で、ほかに隅角部の西石垣１区の石35がある。ただしこのうち石35・石１については基底石の安定を図る根固め石、石８は原位置を移動していると考えられるので、原位置に残された築石は７石である。一方、南石垣では岩盤が西側に傾斜するので基底石据え付け面も傾斜面になる。検出された石垣の長さは５mで、この間の高さは、標高146.0～148.5mを測るので、2.5mの高低差をもつ。残された石垣は１段ない

し２段で、石材の大きさは西石垣１区と差はない。控えについても石４で0.78m、石６で0.76mと長いものが認められる。ただ、据え付けは傾斜面のため東上の石材が西側に一部重なるような積み方となる点が特徴的である。なお、据え付け面は面(つら)調でみると疊層上にあるが、これは岩盤層の風化層にあたる。この上に基底石を据えていた。

なお、南石垣は曲輪の南辺を限る石垣であるが奉安殿が建った戦前の状況を写した写真図版４によれば、この時期は石垣上に土砂が盛られ、石垣は埋まっていた可能性が高い。ただし、写真ではこの玉垣の西下に僅かに段差が確認できるが、これが南石垣の残存部とも推定される。

【西石垣１区】（図版６～８・12、写真図版６～９・13）

西石垣１区石21～35の区間は基底部のレベルが標高146.0m前後と最も低い。北側では石16～20のあたりで基底部のレベルが146.8mと高くなる。一方、北側の石１～13間では146.5mとなり、２区とほぼ同レベルで高さを確保している。このように岩盤を根切りして基底石据え付け面を確保する１区では岩盤地形の削平に制約があり、場所によって据え付けレベルに変動を生じている。

石16～20のあたりで基底石のレベルが上がるのは、丘陵頂部から斜面に伸びる小規模な尾根のためであり、その関係で岩盤隆起を避けたものと考えられる。一方、西石垣１区石23～35周辺は石16～22の逆で小規模な谷地形となるため146.0m付近で安定した根切り面を確保できない。このために据え付け面が下がったものと思われる。

１区の南端は隅角部となるが、この部分の石材である石35は横0.53m、高さ0.32m、控え0.5mの大きさで、石垣に使用された石材の中では平均（平均は横0.52m、高さ0.35m、控え0.642m）的な大きさのものである。形状も他の築石同様に角疊となるが角石と呼べるものではない。

西石垣１区南端は根切り面が低く若干の傾斜を持つが、２段目の石25・27・29・33で146.5mにレベルがほぼ揃えられており、北側の根切り基底部の高さに揃う。そして、下段の石24・26は斜面上に底面を斜めにして据えるが、上段の石23・25によって調整が行われている。これらを考えると実際の石垣基底石は石25・27・29・33である可能性が高い。さらに、上段の石材が石27・29・33のように比較的大きいもので占められるのに対して、下に据えられた石24・26・28・30・31・32・34などは小さいものが多く、大小の差も著しい。また、築石間の空隙が多く、間に大きめの間詰め石が詰められており、雑然とした積み方の印象を持つ。例えば石26・28では石材の上に間詰め石を足して、上位の石27・29との高さ調整を計っている。逆に石30・31・32・34では石材下に間詰め石を据えて高さを調節する。ただし、これは面(つら)調のみで控えには間詰め石はあまり用いられていない。つまり、この場所では下位の石材は上段の基底石相当石材を据えるための基礎石（根固め石）と考えられるのである。

一方、石19・20と石13の間は面(つら)が小さめの石材が空間を埋めるように配置され、表側からみるとやや周囲に比べ不釣り合いな印象を与えている。しかし、石14の控えの長さは0.85m、石15は0.65m、石16は0.89m、石17は0.27m、石18は1.0mと他の石材に比べて遜色がないもので、牛蒡石状の石材をおいて安定を計っている。逆に巨石と思われる石11で控えは0.59m、石13で0.46m、石19で0.51m、石20で控えは0.53mであるので、一見空間を埋めるために石材を積んだように見える石14～16・18は意図的に牛蒡石を積み、上面の石垣との調節を計ったものと理解することができる。この部分では尾根が伸びて岩盤が隆起する斜面部にあたるため巨石を用いると安定が悪くなることから幅を細かく調節できる牛蒡石を用いたのであろう。

西石垣１区の残り北側（石１～10・12）についても石面(つら)が小規模な石材が並ぶ。これらのうち石２が0.79

m、石６が0.7m、石７が0.85m、石９が0.77mの控えを持つなど比較的背後に長い据え方になっている。これらの石材では面の寸法よりも長手側（長軸）を控えに向けており、上段に積む石材の安定を計っている。

【西石垣２区】（図版６・７・９・12・13、写真図版７～11・13・14）

この地区では石３・４・６で唯一３段分の石垣が残され、南側の石10－石11・12間で一石分（0.5m）の入角構造をもつ。検出された石垣は長さ4.75mで１区へは1.9m、北側の３区へは2.7mの間、石垣が崩落する。なお、石７は下位の石材が抜け落ち、樹根によって位置を保ったものである。

２区では基底石据え付け面は146.5～6mで安定的に確保されている。ただし、根切りのための平坦面の確保は２区周辺の小規模な谷地形のため若干東側に入り込まざるを得なくなっている。また、１区の隅角部周辺のようにレベルを下げて根切り面を確保することも崖地形であることからできない。以上の点から地区北側で石垣面を一石分東側に入角にして調整を計ったと考えられる。従って、入角構造は小丘陵の地形に対応した石垣構築上の技術的な手法として考えられる。石10と石12は特に石材同士が重ならず少し隙間を持ち、石12の背面にはグリ石が充填されていた。このため基底石で見る限り入角構造に特に特殊な工夫は設けられていない。

２－３区間が谷地形の底にあたるがこの部分では岩盤層が露出し、根切り面が水平面として確保されていない。このため石垣が崩落したと考えられ、３区手前で近代以降の小礫による石垣が再築されて、石垣の空隙を埋めているが裏込めはなく脆弱なものである。

２区においても間詰め石は顕著で、特に石１の下段は石２・６間を補強して多数の間詰めがおこなわれる。２区では石材の控えは比較的短いものが多い。0.7mを超える石材は石13の0.7mのみである。手前の石12が重要と思われるが、控えは0.62mで特に長いわけではない。また、入角側の石11は0.48mとむしろ控えは短い。なお、本地区で控えが2番目に長いのは、石５の0.66m、次が石６の0.64mであるが、これらの石材の面は石５が横0.52m、高さ0.53m、石6が横0.3m、高さ0.3mである。石５が標準、石６は小さい部類に入るもので、２石は牛蒡石材の小面を面に据えたものといえるだろう。また、石６は石4－8間を埋める上で、基底石の面幅が狭くなってしまったために据えたものである。

【西石垣３区】（図版６・７・10・13、写真図版７・８・10・11・15）

西石垣北側の地区であるが、石材は１段ないし２段分が残されていた。前述の通り２区との間には崩落による空隙が見られ、後世の積み直し石材が追補されていた。基底石据え付け面は147.0m前後にあるが、石６～18の間では18～18cm前後高くなっている。ただし、他の地区と異なって３区では基底石据え付け面が岩盤に直接据えられるのではなく、旧表土上に石材が置かれている。根切り作業は一応実施され、背面では部分的に岩盤面を掘削するものの、確実に基底石を岩盤面に据える意識は希薄である。

また、３区北側では石12・13より西側に石垣面が湾曲しながら張り出している。その北側では北区への接続のために隅角部が存在したはずであるが、その手前まで湾曲部分が続いている。残念ながら隅角部は破壊されているが、この部分も特に岩盤上に据えるものではなく旧表土を整地した面に石材を据えていたと考えられる。

石垣面の湾曲は北側隅角部周辺が郭上から小規模な尾根地形が張り出すことによって生じたと思われるが、軟弱な堆積土を除去せず、さらに石垣面を湾曲させて構築している。１区などの状況からすると直線で通すことは技術的には可能とみられるので、これを省略した手抜きの簡易施工となっている。このため旧表土を残したまま基底石を据える点や、根切り面の安定に労力を割かない点など３区は石垣構築にやや雑な面が多く感じられる。

石材に関しては石11～石20間が比較的大きな石材を使っている。この範囲は石垣面を湾曲させる場所にあたるが、特に湾曲の始点にあたる石12・13－石14・15では平石で安定の良い巨石を据え不規則な積み方を補強する。また、湾曲部北側の石１－12間では控えの長い牛蒡石を用いる傾向がある。面が小さい石材を用いることで微妙なカーブに対応した積み方で調整を計っていると思われる。従って、この部分での石垣は一見すると、他の地区に比べ小さな石材で雑な積み方をしたようにも見えるが、実際は石８の0.74mを筆頭に、控えが0.7m代の石材が石１・２・10・11など多数あり、逆に0.5mを下回るものは石３・６の２石のみである。また、３区で石垣が２段分残されるのは石７－石20の間に限られるが、この部分の２段目の石材は石７・８・11・12・14・17・19・20である。これらのうち石12・14・20は平石であり、全体的に大ぶりな石材が多い。一方、基底石のほうは１辺が0.4～0.5m代の石材が多く突出して大きな石材が見られない。これは基底石背面の根切りの奥行きとも関係しており、１・２区と異なって３区では根切りの奥行きが深くとられていないことから、控えの幅が小さく、石材も大型のものを用いていない。その一方で２段目には面側が大きく、奥行きも充分にある大型の石材を用いて安定をはかる傾向がある。

【西石垣北区】（図版13、写真図版10）

長さ6.7m、石材12石分が調査区外に残されていたもので、現状を実測し記録を取った。ただし、地中部分については現状のままとした。基底石の状況は不明であるが、現況で見えている石材がほぼ基底石と考えられる。ただ、現況の範囲では南側から３・４・５石目、７石目の石材は築石ではない可能性があり、これらの石材は基底石のカイ込め石や間詰め石である可能性が高い。また、石垣の背面には拳大程度のグリ石と思われる石材が散見される。このため、旧状は西石垣の他の部分と同じく郭上面まで石垣が存在したと考えられる。

一方、石垣の数m北側は隅角部となり北辺に至るが、残念ながら地表面ではそこまで石垣の存否を確認することはできなかった。ただし、周辺にはグリ石と酷似する石材が斜面に散見されることからすると、石垣は少なくとも西辺から北辺に至るまで隅角部で折れて延びていたと推測される。

南側についてはアスレチック施設の整備によって、小丘陵頂上から西斜面に降る通路が整備される。これによって、北西側の郭縁部の切り下げが行われ斜面が大きく破壊された。特に、西石垣３区と北区の間の入角部分が破壊され、西石垣３区から北区へ繋がる石垣については完全に消失しており、旧状を知ることができなかった。ただし、移動した石材が散乱することから石垣が存在したことは疑いがない。

【石垣断面】（図版11～13、写真図版13～15）

今回の調査では南石垣では南石垣ＡおよびＢ断面、南断面の３か所を観察した。西石垣では背面までを断ち割った断面を西石垣Ａ～Ｇ断面の７箇所、さらに石材の据え付け状況を確認するため１区に断面Ａ－１・断面Ａ－２の２箇所、１区の隅角部を観察する目的で隅角ａ・ｂの２箇所を設け、合計11箇所の断面を観察した。このほか調査区東壁の頂部から南側に傾斜する範囲を観察するために東断面を設けた。

ここでは、断面の観察と背面の根切り状況などを確認しながら①根切り作業、②法面の加工、③グリ石、④基底石据え付けなどについて検討を行う。

根切り作業は西石垣１・２区周辺では郭面から３ｍ下の斜面を掘削して行われている。具体的には基底石を据えるための平坦な段を造りだす。基底石を据える場所については岩盤層を削り平坦面を確保し、背後に崖地形ができることによってＬ字形の地形を造り出している。断面Ａで基底石を載せる平坦面が1.2m、背面に高さ1.0mの崖地形が形成される。断面Ｂで前者が1.3m、後者が0.9mである。断面Ｃで前

第１表　石垣石材寸法表

（単位はcm、体積はcm³）

石材No.	横幅	縦長	控え長	体積	石材の種類
南石垣					
1	18	27	44	21384	
2	30	28	60	50400	
3	42	21	28	24696	
4	65	46	78	233220	
5	60	36	45	97200	
6	45	33	76	2508	
7	23	11	32	8096	
8	38	20	54	62640	
西石垣１区					
1	40	30	56	67200	花崗斑岩
2	45	32	79	113760	
3	42	35	53	77910	
4	43	35	52	78260	花崗斑岩
5	38	30	52	59280	
6	38	23	70	61180	花崗斑岩
7	50	55	85	233750	花崗斑岩
8	60	36	68	146880	流紋岩
9	53	26	77	106106	
10	50	34	52	88400	
11	82	54	59	261252	
12	41	33	72	97416	花崗斑岩
13	67	41	46	126362	
14	22	43	85	80410	
15	23	25	65	37375	花崗斑岩
16	51	45	89	204255	流紋岩
17	43	18	27	20898	
18	23	35	100	80500	
19	78	33	51	131274	
20	50	40	53	106000	
21	79	28	71	157052	流紋岩
22	40	35	77	107800	花崗斑岩
23	35	35	62	75950	流紋岩
24	93	29	51	137547	
25	51	30	75	114750	
26	56	44	68	167552	
27	100	32	50	160000	花崗斑岩
28	49	36	66	116424	
29	70	42	101	296940	
30	48	29	54	75168	
31	47	37	43	74777	流紋岩
32	40	31	51	63240	
33	60	29	70	121800	
34	50	36	68	122400	
35	53	32	50	84800	

石材No.	横幅	縦長	控え長	体積	石材の種類
西石垣２区					
1	70	44	58	178640	
2	83	29	68	163676	
3	63	47	36	106596	花崗斑岩
4	64	25	57	91200	
5	52	53	66	181896	流紋岩
6	30	30	64	57600	
7	70	28	63	123480	
8	40	51	48	97920	
9	54	38	55	112860	
10	65	31	55	110825	
11	50	30	48	72000	
12	75	29	62	134850	
13	43	43	70	129430	花崗斑岩
西石垣３区					
1	60	30	71	127800	
2	38	28	72	76608	
3	27	28	39	29484	
4	60	24	51	73440	
5	60	25	50	75000	
6	54	40	48	103680	花崗斑岩
7	51	22	63	70686	
8	39	44	74	126984	
9	46	26	65	77740	
10	62	21	70	91140	
11	60	38	70	159600	
12	85	39	82	271830	
13	42	26	62	67704	
14	84	33	79	218988	
15	43	26	49	54782	
16	52	35	48	87360	
17	49	34	81	134946	
18	46	51	76	178296	
19	30	20	57	34200	
20	59	42	100	247800	
21	54	38	58	119016	流紋岩
22	56	35	56	109760	花崗斑岩
23	37	43	73	116143	
24	50	33	80	132000	
25	30	25	54	40500	
26	46	32	49	72128	
27	45	50	54	121500	砂岩
28	47	40	70	131600	花崗斑岩

グリ石―花崗斑岩1個・流紋岩3個
付近の山から採取した石材―粘板岩2個、流紋岩1個・凝灰岩1個

者が1.1m、後者が0.3m、断面Dで前者が1.1m、後者が0.9m、断面Eで前者が1.3m、後者が0.75m、断面Fで前者が0.5m、後者が0.4m、断面Gは前者が0.5mで後者は0.3mとなる。このほか、１区のA－１断面は前者が0.85mで後者が0.6m、A－２断面では前者が0.75mで後者が0.5m前後である。

以上から概ね基底石を据えるための平坦面は1.1～1.3m前後で、背面の岩盤壁地形の段差は１m前後のものが平均的であることがわかる。これに対して１区の断面A－１・２周辺では基底石平坦面が0.8m前後で背面の根切りは高低差0.5m前後と小規模となる。他の断面では基底石を据えるために背後の作業スペースを0.3～0.5m前後確保するが、１区南端ではこれが考慮されていない。

２区の断面もほぼ１区に準じている。基本的には裾部の岩盤を掘削しての小規模な根切り加工と背面

表層の凹凸を調整する普請が行われている。

3区でも基本的には1・2区と同様と考えられる。しかし、基底石据え付け面が岩盤層まで確実に達することはなく、南側（石18～28）では表土層を残したまま据え付け面を造成している。断面Eでは基底石は表土層の上に据えられ、背面のグリ石が岩盤上に位置するので、背面では確実に岩盤層を削りこんでいることがわかる。このため全体的には岩盤上の安定した面を据え付け面とすることは意識されるが、3区では石垣を築くラインを重視したか、もしくは単なる手抜きかどちらかの理由で表土上に据え付け面を設定している。

次に、石垣の角度と背面の問題であるが、残された石材をもとに石垣の角度を計測すると70°前後の値が算出される。ただし、石垣上半が残されていないのでここでは概ね60～70°前後と推定しておきたい。そこで、この復元でグリ石幅を推定すると石垣上半では1m前後グリ石が充填されていたことになる。基底石の背後では0.5m前後なので、上方ではグリ石幅が広がることがわかる。

一方、石垣の背面は根切りによって基底石据え付けのための造成を行うが、上方では基本的に岩盤層までの掘削を伴う著しい加工は行われない。このためグリ石層の背面には旧表土が残されている場所も多い。ただし、石垣面の背後全体が自然地形の上に石垣を構築したのではない。グリ石層を除去すると旧表土層を残す部分が多く認められるものの、全体的には均されて凹凸のなくなった斜面が検出された。従ってこの斜面の表面は人工的な加工によって平坦化されたと考えられる。つまり、著しい根切り加工は行わないものの石垣構築の前段階で石垣面を均一に均す簡易な加工が行われているのである。

5．石垣石材（図版7・第1表）

石垣石材の内、後述する30点について株式会社古環境研究所に委託して目視による石材鑑定を実施した。これらはサンプルとして持ち帰った石垣石材のうち、特徴的なものを30点抽出して行ったものである。この結果、石垣石材はおおむね流紋岩質のもので占められ、ごくわずかに砂岩が含まれることが判明した。一方、周辺の地質については報告によれば、「周辺の山体にはデイサイトや流紋岩類より構成される後期白亜紀の珪長質火山岩類とジュラ紀の堆積岩が分布している。今回同定した資料は、正に地質図に分布が示されている岩石種で有り、遺跡の極近隣で採取した石材と推定される。」「今回、花崗斑岩・流紋岩と区別したが、流紋岩類とまとめた名称で表現する方が現実的かもしれない。」（株式会社古環境研究所）と述べている。一方、この時期に多い転用石は石臼（S2など）がグリ石に混じるが、ほかにはない。従って、前段階の居館などで使用された石材を意識的に転用するものではないと考えられる。

石垣石材の供給地として最も有力なのが構の東背後、現在長水城址への大手道とされる谷筋である。谷の最奥部は山頂の尾根筋付近に達する深い谷であり、谷底には巨礫が随所に露頭して堆積する。ただし、東背後直近の谷中で採取した石材には、第1表の通り粘板岩・流紋岩・凝灰岩など様々なものが含まれ、必ずしも石垣石材の石材だけに限らない種類のものが含まれた。この点に関しては今後の課題である。ただ、石垣石材は地質的には近隣と考えて矛盾しないので、本報告では石材の供給は長水山南東斜面、伊水川の谷筋の石材を選択して採集したと考えておきたい。

第４章　出土遺物

１．概要

出土遺物は土器類では土師器皿、備前焼擂鉢・壺・甕・水屋甕、瓦類では軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・面戸瓦・磚、石製品では石臼・茶臼、自然遺物では海生の巻貝などがある。出土土器の内、図化できた点数は土器類が15点、瓦類が38点、石製品が７点、自然遺物１点である。

これらの遺物はグリ石（裏込め）や石垣背面の旧表土などから出土した。一方、表土付近で検出された瓦などについても、大半がグリ石周辺からの出土で、中には層中に含まれると判断した方がよいものも含まれている。このためこれらの遺物には石垣が築かれる以前のものが含まれる。

２．土器（図版14、写真図版17）

土師器皿１～４はすべて京都系土師器である。１・３は底体部の境がやや明瞭な平底になるが、２はやや丸底ぎみになる個体である。器壁は３～４㎜程度で口縁端部の横ナデは丁寧である。３は体部中位に屈曲が見られる。４は口縁部の個体で口縁部の横ナデは丁寧であるが、やや器壁が厚い個体である。いずれも16世紀中頃～後半にかけてのものであるが、器壁の薄いものが多い点から考えるとやや古色を有すると考えられるだろう。

備前焼擂鉢は５・６の２点を図化した。５は口縁の縁帯が湾曲しながら内湾し内面側に面を持ち、縁帯外面に凹線状の凹凸が見られる。口縁部片のため卸目部分を欠損する。内外面のロクロ痕跡が顕著である。６は口縁部が上方に拡張するもので、内面側に面を持つ。縁帯部下端は外側に張り出すもので体部との間に屈曲部を持つ。体部内外面は５と同様にロクロ痕跡が顕著である。卸目は５本単位で、上下のものと、斜めの卸目のものがある。これらは近世１期ｂ段階のものと判断され、年代的には16世紀後半段階にあたる。

備前焼壺は７～12の６個体を図化した。壺７は無頸壺の口縁部片で器表が暗赤褐色を呈し、蓋が付くタイプである。壺８は頸部から口縁部にかけての破片、９・10が肩部、11・12が底部の個体である。９・10の肩部には波状文と３条の沈線が施文される。11は体部下端にヘラ削りによる調整が施され、12は体部外面のロクロ痕跡が顕著な製品である。

備前焼甕は13～15の３個体を図化した。13は口縁部の破片であるが縁帯が拡張し、外傾気味に立ち上がり、外面に３条の凹線が観察される。14と15は肩部の個体で、14は水屋甕の破片である。15は内面にヘラ削り痕跡が観察される。14の外面には自然釉がかかる。

以上のとおりであるが、土器類は個体数が少ないうえ、土師器皿と備前焼に限られている。このため、これらが遺跡の様相を正確に反映するものかどうかは疑問が残される。その点を考慮したうえで、これらの土器群について検討を行う。まず、出土場所であるが土師器皿１～４は西石垣３区の石28背後のグリ石下の旧表土層からの出土である。備前焼は西石垣１区・南石垣との隅角部の上方、郭面近くのグリ石層の直上ないし、グリ石表層から出土したものが大半を占める。出土土器のうち土師器皿はいわゆる京都系土師器であるが、長水城址の採取資料にも含まれ、播磨の山間部では城郭、寺院に多い出土品である。備前焼は、甕や擂鉢が16世紀後半に比定される。

3．瓦類（図版15～19、写真図版18～21）

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・磚がある。瓦は炭素吸着が安定しており、胎土も精良である。

軒丸瓦は瓦１～瓦４の４点がある。ただし、軒丸瓦の文様の全容がわかるものは瓦１の１点に止まる。瓦２は文様構成の巴文と珠文を残すが瓦３・４では珠文が僅かに判別できる程度である。但し、文様の判別から見ると１種類と考えられる。瓦当文様は左巻き三つ巴文で尾部は長く約半周して隣の巴文の中ほどに続く。巴文の隆起は顕著であるが稜はもたず、文様は比較的明瞭である。珠文は24個で均等に配される。筒部も含めた瓦の全体を知ることができる個体はないが、瓦当部の径が筒部より大きいため、筒部から瓦当部への接続は瓦当手前で大きく開いたような形状となる。瓦１で瓦当の径が13.2㎝、周縁を除く文様部の径が9.8㎝である。内面のコビキ痕跡はコビキＡである。側面の面取りは端面と側面の２段ケズリが基本で、端面が幅１㎝前後、側面部が広いところで２㎝前後である。外面には縦方向のヘラ削りが顕著に観察される。なお、筒部の接合は顎部を貼り付ける形で行われている。

軒平瓦は瓦９～瓦20の12点がある。１種類の文様ですべて同笵瓦である。花弁状に開く中心飾りを持ち左側は３反転する唐草文、右側は末端の唐草から支脈が上方に伸びて４つの唐草で構成される。ただし、中心飾りが瓦当面の中心ではなく左側に寄っており、中心飾りから右側の周縁側面部までの寸法が9.3㎝であるが、左側は7.6㎝である。また、右側の右端の唐草は笵が瓦当幅より広いため右端を切った形で使用している。瓦当の横幅20.4㎝、高さ3.8㎝（中心飾りをもとに推定した寸法。文様部分で同じく16.5㎝、1.7㎝）を測る。瓦９の凹面部瓦当の縁は面取りを行い、瓦面はヘラ削り調整が顕著である。平瓦部との接合は顎を貼り付ける形で行われている。

なお、本瓦の中心飾りについては播磨では姫路城・心光寺（姫路市）に類似のものがある。さらに大坂城や岡山県下でも出土が知られ、播磨系の瓦職人の技術伝播が指摘されている。（山崎信二2008）。姫路城例は笵の幅が短く唐草の末端が切られており、心光寺例は唐草４反転文様を持つ。これらの瓦の文様は中心飾りや唐草全体を通じて共通する点が多いが、本事例は唐草の配置が大きく異なり、基本的に唐草が３反転であることや、文様全体の意匠が簡略化される点からは後出の印象を受ける。さらに、左辺で唐草を笵に追加するなどやや稚拙な印象がもたれる。

丸瓦の出土個体には12か所の隅部と、５点の玉縁が残される。出土したもののうち瓦６～８の３点を図化した。瓦６は軒瓦とセットになるもので、玉縁手前の筒部に釘穴を持つ。コビキＡで玉縁部凹面に絞り目が観察される。瓦７は長さ37.6㎝、幅18.0㎝と大型の瓦である。瓦８についても同様の法量と思われる。この２点の瓦は軒瓦とは明らかに法量が異なるので同じ屋根にセットで使われた瓦ではない。端面と内面に面取りを行うが内面の面取りは幅2.3㎝と幅広である。端面は1.1㎝である

平瓦の出土個体には62か所の隅部が残される。出土したもののうち瓦36・37の２点を図化した。いずれもコーナー部の小片であるが、全体の形状を知ることはできない。２個体とも釘穴をもつが瓦36は釘片が残されていた。

面戸瓦は瓦５の１点がある。上半を欠く個体で、凹面部にコビキＡを観察することができる。凸面部のミガキないし板ナデ調整は丁寧で平滑に仕上げている。なお、瓦のうち、軒丸瓦・軒平瓦については すでに田中幸夫氏（田中幸夫2004）によって紹介されているが、今回の出土資料と同一の製品と判断される。田中氏紹介資料によれば瓦当面には接合のためのカキヤブリが観察される。一方、これらが長水城址の採取品とは異なる製品であることも既に同氏によって紹介されている。（田中幸夫2004）

磚瓦は瓦24～瓦35の12点がある。これらの磚のうち瓦27・28・33が濃桃色、瓦26が薄桃色の器表をも

ち全体的に被熱を受けている。この点、他の瓦とは表面的な印象が異なっており、機能時期が異なる可能性が高い。残念ながら全体を把握できる個体はなく、法量を測れる個体もない。瓦25～27・29・30・32～34でそれぞれ1個ずつのコーナーを残しており、磚の厚さは２～2.5㎝である。

そのほかでは瓦21～23・38は近代以降の瓦である。瓦21は軒平瓦片であるが瓦当の周縁の一部が残されるのみである。瓦22は小型の軒平瓦であるため塀などに使われたものと考えられる。中心飾りが半裁した菊文で、瓦当は厚さ1.6㎝と薄い。瓦23・38は平瓦の破片である。瓦23には刻印が見られるが部分的で判読はできなかった。これらの瓦は奉安殿周辺に使用された可能性が高い。

４．石製品・その他の遺物（図版19・20、写真図版22）

茶臼はＳ１～Ｓ３の３点が出土した。砂岩系の石材を用いた製品でＳ１・２が上臼、Ｓ３が下臼である。いずれも一部ないし大部分を折損しており意図的に割られた可能性が高い。Ｓ１は底部の破片で両側に挽き木の差し込み穴の一部が観察され、底面には溝が放射状に施される。溝は８分画で主溝から右側に隣接する主溝に並行して７本の副溝が伸びている。溝の幅は１㎜と細いものである。この下面には仕上げのための工具によるハケ状の調整痕跡が顕著に残される。溝の断面はＵ字形である。軸穴は直径2.3㎝を測る。Ｓ２は上面外周に縁が付き、中央に直径2.2㎝前後の軸穴が通る。軸穴には穿孔時の工具痕跡が上下方向から残される。下面の溝は破損によって確認できない。臼の両側面には挽き木の差し込み穴が観察される。Ｓ３は溝が８分画で主溝から右隣の主溝に並行して６本の副溝が伸びる。ただし、摩耗によって溝の残りは良好ではない。溝の幅は１～２㎜前後と細い。軸穴は直径２㎝前後である。下臼の周囲には粉体を受けるための受け皿が付く。

石臼はＳ４～Ｓ７の４点が出土した。すべて粉挽き臼で下臼と思われる。何れも周囲を打ち欠いて意図的に割られた破片である。Ｓ４・５・７には軸穴が残り、工具によって穿孔を行った加工痕跡が敲方向に残される。溝はＳ４・５・７が８分画でいずれも主溝から３本の副溝が右隣の主溝に並行して伸びている。溝の断面は基本的にＵ字形で、幅はＳ６が２～３㎜、そのほかは４～６㎜前後である。Ｓ７の底面やＳ６の底部にはノミ加工の痕跡が残される。

その他、西石垣１区裏込めからグリ石に混じってアカニシ貝が出土した。（写真図版20下段右参照）食用に供されたものと思われるが、この貝殻は燈火に利用されることも多い。

引用文献

三和茂雄1978『臼』
乗岡実2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回近世備前焼研究会資料』
乗岡実2000「中世山城の瓦３題」『吉備されど吉備』
田中幸夫2004『播磨の中世瓦』
山崎信二2008『近世瓦の研究』

第2表　遺物観察表

土　器

No.	地区	出土場所	種別	器種	法量（cm）			残存			成形・調整方法の特徴・文様
					口径	器高	底径	口縁	底	他	
01	南石加３区	旧表土	土師器	皿	(11.75)	(2.1)	(6.2)	1/12	—	—	手づくね、京都系土師器
02	南石加３区	旧表土	土師器	皿	(13.7)	(2.7)	—	1/16	小片	—	手づくね、京都系土師器
03	南石加３区	旧表土	土師器	皿	(13.80)	(2.4)	—	1/8	1/3	—	手づくね、京都系土師器
04	南石加３区	旧表土	土師器	皿	(14.80)	(1.55)	—	1/16	—	—	手づくね、京都系土師器
05	南石加背後	グリ石内	備前焼	擂鉢	(30.40)	(6.35)	—		細片		近世１期ｂ段階
06	郭北端	グリ石上層	備前焼	擂鉢	—	—	—		細片		近世１期ｂ段階
07	南石加背後	グリ石内	備前焼	壺	(12.7)	(2.6)	—		細片		無頸壺の口縁部片
08	南石加背後	グリ石内	備前焼	壺	—	(5.6)	—		細片		無頸壺の口縁部片、水屋甕の可能性がある。
09	南石加背後	グリ石内	備前焼	壺	—	(13.0)	—		細片		肩部に２条の波状文と２条の多条沈線文
10	南石加背後	グリ石内	備前焼	壺	—	(5.9)	—		細片		肩部に波状文と３条沈線文
11	南石加背後	グリ石内	備前焼	壺	—	(8.5)	(20.0)		細片		底部ヘラ削り調整。
12	南石加背後	グリ石内	備前焼	壺	—	(14.6)	(19.30)		細片		水挽き痕跡顕著
13	南石加背後	グリ石内	備前焼	甕	—	(8.2)	—		細片		口縁部の破片、自然釉が観察される。
14	郭北側	表土	備前焼	甕	—	(10.00)	—		細片		肩部の破片、自然釉が観察される。
15	寺安郷		備前焼	甕	—	(10.85)	—		細片		胴部の破片、内面板ナデ調整。

瓦　類

No.	地区	出土場所	種別		法量（cm）			残存			
					瓦当径	筒部長	筒部幅	瓦頭	筒部	全体	
瓦１	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒丸瓦	(13.2)	残 12.5	—	9/10	1/10	瓦当片	コビキA
瓦２	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒丸瓦	—	残 15.8	—	3/10	1/20	瓦当片	コビキA
瓦３	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒丸瓦	—	残 11.4	—	1/20	欠損	瓦当片	コビキA
瓦４	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒丸瓦	—	—	—	小片	—	瓦当片	
瓦５	南石加背後	グリ石上面	瓦	面戸瓦	—	—	—	1/8	—	4/10	
瓦６	南石加背後	グリ石上面	瓦	丸瓦	—	残 22.6	13.0	—	4/10	玉縁残	釘穴あり
瓦７	南石加背後	グリ石上面	瓦	丸瓦	—	37.6	18.0	—	4/10	玉縁残	コビキA、釣り継痕跡
瓦８	南石加背後	グリ石上面	瓦	丸瓦	—	残 10.85	残 15.65	—	1/10	細片	コビキA、釣り継痕跡
瓦９	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	—	残 11.4	—	5/8	—	瓦当片	
瓦10	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	残 3.0	残 7.6	—		細片	瓦当片	
瓦11	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	4.0	残 9.3	—		細片	瓦当片	
瓦12	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	—	残 7.2	—		細片	瓦当片	
瓦13	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	3.7	—	—		細片	瓦当片	
瓦14	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	3.75	—	—		細片	瓦当片	
瓦15	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	3.5	—	—		細片	瓦当片	
瓦16	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	—	—	—		細片	瓦当片	
瓦17	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	3.8	—	—		細片	瓦当片	
瓦18	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	—	—	—		細片	瓦当片	
瓦19	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	4.1	—	—		細片	瓦当片	
瓦20	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	4.1	—	—		細片	瓦当片	
瓦21	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	—	残 10.7	—		細片	瓦当片	
瓦22	南石加背後	グリ石上面	瓦	軒平瓦	—	—	—		細片	瓦当片	
瓦23	南石加背後	グリ石上面	瓦	平瓦	—	—	—		細片	細片	刷毛目あり
瓦24	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.5		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦25	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.3		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦26	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.3		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦27	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.4		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦28	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.4		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦29	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.5		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦30	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.0		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦31	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.85		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦32	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.5		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦33	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.4		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦34	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.2		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦35	南石加背後	グリ石上面	瓦	縛	—	—	厚さ 2.3		細片	細片	被熱のため若干赤色化する。
瓦36	南石加背後	グリ石上面	瓦	平瓦	—	—	厚さ 2.15	1/6	4/10	細片	釘穴あり
瓦37	南石加背後	グリ石上面	瓦	平瓦	—	—	厚さ 1.95	小片	4/10	細片	釘穴あり
瓦38	南石加背後	グリ石上面	瓦	平瓦	—	—	厚さ 2.0	1/5	4/10	細片	

石製品

No.	地区	出土場所	種別		直径	厚さ	上面	底部	全体	
S１	土郭	—	石製品	茶臼	18.4	—	欠損	4/10	小片	上臼
S２	西石加３区	グリ石内	石製品	茶臼	19.95	12.7	5/10	5/10	半分	上臼、写真あり（図版12）
S３	西石加１区	石垣下法面	石製品	茶臼	(28.4)	9.9	3/10	2/10	小片	下臼
S４	表採	—	石製品	石臼	(31.0)	9.6	3/10	2/10	小片	下臼
S５	郭南隅	グリ石上面	石製品	石臼	(31.5)	12.2	4/10	2/10	小片	下臼、写真あり（図版12）
S６	郭南西隅	グリ石内	石製品	石臼	—	—	小片	小片	小片	下臼
S７	郭南西隅	グリ石内	石製品	石臼	(31.0)	12.2	4/10	4/10	小片	下臼、写真あり（図版12）

第５章　宇野構遺跡のまとめ

１．はじめに

本稿では宇野構（本章では構名称として宇野構とした）の歴史的な概要について述べたうえで、石垣などの調査成果について検討を行う。

これまでの通説では長水城址落城後、宇野氏は政頼・祐清父子など城主一族の大半が滅亡し、本城をはじめ関係した城郭のすべてが廃城になったとされてきた。しかし、今回の宇野構の調査成果によってこの構が宇野氏滅亡以後に改修されて、城郭構造が存続したことが明らかになった。検出された石垣は最大で３段分、大半が１段と残存状況は良好ではないが、明らかに織豊系城郭に特有の石垣構造を有するものであり、この改修に際して瓦葺建物が存在した可能性も考えられる。一方で、石垣背面からは少量であるが土師器皿が出土した意義も大きい。これらの土師器はいわゆる京都系土師器でグリ石下の旧表土層から出土した。時期は戦国時代末期のものとみなされ、石垣遺構が構築される以前の宇野氏居館の存在を傍証する資料となった。今回の調査では宇野氏段階の居館に関する成果はこれ以外にはなく、詳細について明らかにできなかった点が悔やまれる。

２．歴史的経緯

宇野構は中世高家（たいえ）荘の西北端、伊沢川の蛇行する場所に所在する。伊沢川は構付近で谷を塞ぐように大きく蛇行するが、構はこれを監視するように谷東側の段丘上に選地されている。付近の河床は谷平地より５～６ｍ低いので、おそらく下流への用水は構周辺を通過して配分される形になり、この点で構周辺は、重要な位置を占める場所であったことが推測される。

高家荘には室町期に赤松氏の守護代所が置かれたが、これを広瀬と呼んでいる（小林基伸2006）。この守護代所の具体的な場所は明確ではないが、伊沢川が揖保川に合流する西岸周辺と推定される。この一帯は揖保川の沖積低地が広がることから広瀬と呼ばれたようで（平凡社1999）、現在でも今宿・中広瀬・船元や北側に三津の地名が残され、川床には須恵器などの土器が散布する（吉識雅仁氏のご教示による）。戦国時代に長水城址が築城されると、南側の宇野（本地名は後出のものである）に居館及び城下が形成され宇野氏の本拠となるが、この居館の選地はこの場所が高家荘の西北端に位置したことに関わりがあるとされ、「赤松氏奉行人連署要脚段銭支配状」（天文三年六月五日付け　伊和神社文書）に伊沢の地名が登場するが、依藤保氏はこれを宇野構に比定し、伊沢の地名を高家荘の別称に推定する。（宍粟市教育委員会2014）。そして、長水城址落城直後の天正８年（1582）５月12日には羽柴秀吉が田恵村に禁制を掲げているが、これは宇野氏本拠である宇野構に掲げたものという。天正11年の播磨における配置で秀吉は前代を踏襲して神子田半左衛門正治を広瀬城に据えるが、（「秀吉事記」）この広瀬城は前述のとおり高家荘の荘域との関わ

第18図　調査前の宇野構遺跡（西から）

りから宇野構に比定される。（宍粟市教育委員会2014、およびこの点について盛永耕三氏は広瀬城を宇野構に比定し、検出石垣を神子田段階のものと指摘している。）神子田氏が天正13年に改易されると黒田官兵衛孝高が宍粟郡を拝領し、おそらく宇野構を拠点としたと思われるが、天正15年には中津に移封された。そのあと龍野を本拠とする木下勝俊が宍粟郡を拝領することとなる。

3．宇野氏段階の居館

前述のように調査成果からは直接居館の存在を裏付ける成果は見られなかった。ただし、調査区の西側、旧幼稚園の敷地内にかつて土塁があり、居館の痕跡がわずかに残されていたという。また、字「構」の畔称や立地から見ると、小学校校庭周辺が宇野氏段階の居館であったことは疑いないといえる。

さらに、膝下の字「殿町」、村名の上町・中町・下町、そしてかつて存在した字「市場」など城下を推定させる地名の存在もこれを傍証するものである。つまり、小規模ではあるが膝下には城下も存在したと思われる。ただし、この城下は木下勝俊書状によれば天正15年に山崎（現市街）に移転し（「木下勝俊書状」（山崎八幡神社文書））、この段階で拠点としての機能を失ったことが推測される。

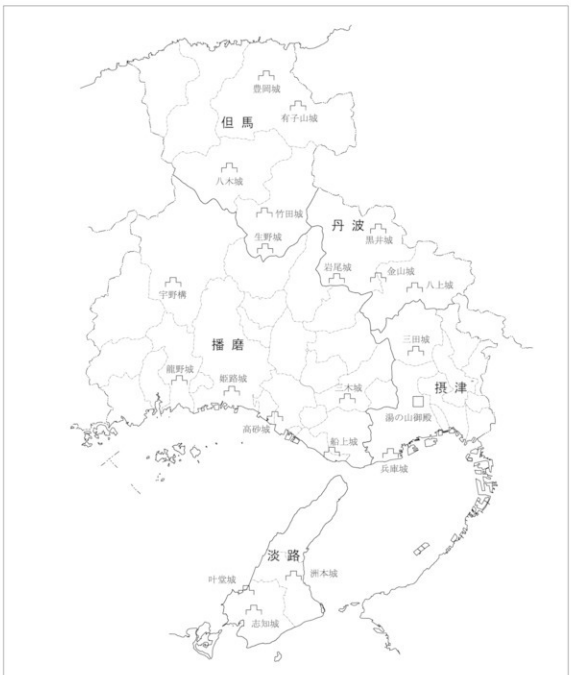
4．検出遺構の年代観と出土遺物

今回検出された石垣は昭和57年当時、宍粟市教育委員会では、すでに検討が行われ、織豊段階の可能性が指摘されていた（宍粟市教委 垣内章氏のご教示による）という。しかし、昭和60年に実施されたアスレチック施設の整備に伴って石垣そのものは地表下に埋もれたようで、その後検討や調査がおこなわれた形跡はない。一方、瓦については村上立氏が現地で採取し田中幸夫氏によって今回と同様の瓦が以前に紹介されている。（田中幸夫2004）これらの瓦は前述したとおり姫路城の天正期瓦に類似するものが認められ、姫路城との共通性や姫路系の瓦職人の関与を推定させるものである。さらに平瓦文様の中心飾りは大坂城や岡山城にも類例が追及でき、既述の通り天正８～10年代中ごろのものと考えられる。この点は土器についても記述の通り瓦の年代と矛盾しない。

一方、出土した磚の大半には被熱痕跡があるが、瓦にはその痕跡が観察されない点が注目される。両者は混在して出土したため、層位によって時期差を分析できないが、被熱痕跡に明確な差があるため、磚と瓦の使用時期が異なっていた可能性が高い。一方で石垣については被熱の痕跡が観察されないので、瓦と石垣の機能時期が同一と考えられる。つまり、瓦葺建物＋石垣の段階と、磚を持つ遺構が存在した段階とで時期的な変遷が考えられるのである。そして、最終面を覆った石垣の存在から、磚を使用した段階が先行すると考えることができる。

ところで、瓦・土器が出土した場所であるが、南石垣および西石垣の隅角部の上ないし石垣背面の裏グリにあたる場所周辺である。この地点は小丘陵頂部の南端に位置し、郭南西隅にあたる。この隅角部は既述のように石垣の高さが最も高く、麓へも目立つ場所である。この意味では構の中心部を見下ろし、威容を示すうえで最適の場所にある。ここに瓦が集中的に出土したことは、石垣上面に瓦葺の櫓が建った可能性を推測される。

以上のことから宇野構の変遷をまとめると、①宇野氏段階、②磚を使用した段階、③石垣が構築され瓦葺構造の櫓が建った段階の変遷が想定される。ただし、①・②については共時性をもつ可能性（ただし、土師器皿に被熱痕跡はない）があり、磚を使用した建物が宇野氏段階に存在したとしても、播磨の事例から見て矛盾はない。このため、本報告では２ないし３段階の変遷があったと考えるに留めておきたい。



第19図　兵庫県下の織豊期城郭

次に、今回の調査地点の位置づけと、構の構造について触れておきたい。構の本体は字「構（かまえ）」と呼ばれる小学校敷地にあったと考えられるが、かつては小学校校舎北側に土塁が残されていたという。現在の小学校敷地は１辺80mほどの校庭（校舎・体育館・校庭）と、北側の１mほど低い校庭裏の広場（この場所は旧保育園敷地であったが、現在は駐車場などに使用）の２地区にわけられ、この２つの範囲が字「構」である。校庭は昭和12年の古写真によれば現在の敷地規模から変化がなく、調査区の小丘陵も南側が若干切り下げられ変化がみられるが、大きな地形改変はないようである。このため昭和初期以前に地表面に残された構の痕跡は改変を受けていたことが考えられる。ただ、校庭敷地はほぼ方形を呈し、東背後に調査区のある小丘陵が位置する。つまり字「構」には小規模であるが、居館的な構造の構が存

在し、北側に顕郭的な曲輪が存在した可能性が高い。一方、調査地点の小丘陵はこれらの背後に位置することから、詰城的な機能をもった郭と考えられる。また、小丘陵からは宇野氏段階の遺物が石垣下層から出土した事実を重視するならば、戦国期から遺構が存在し最終の石垣の段階まで詰城機能を踏襲した構造が維持されたとみられる。

次に石垣であるが、検出された石垣は大半の石材が崩落し、石垣下端の１～３段のみが残されていた。これまでの研究では天正８～10年代前半頃の石垣は、北垣聰一郎氏のⅠ期２段階、堀口健弐氏のⅠ期古相にあたる。両氏の見解によれば、算木積が意識されるが完成には至らない段階となる。要するに技術的には城郭石垣としての要素は出揃うが、ソリはなく石材の規格化が未熟で、隅角部の角石と築石の差もない。さらに、角脇石の意識がない段階ということになる。

宇野構の石垣の隅角部については①南石垣と西石垣の交点、②西石垣２区の入隅部、③西石垣３区と北区へつながる入隅部などがあるが、前２者は基底部分のみであり、後者は石材が原位置に残されていない。従って、隅角部で石垣構造について詳細な検討を行うことは今回の調査成果からは困難が伴う。このため検討は①・②の隅角部について若干の指摘を行うに止めたい。①の隅角部では築石部の平均値よりもやや小さめの石材を用いる。算木の意識は認められるが、角脇石については意識されない。ただし、この部分は、第３章で述べた通り石垣本来の基底石ではなく、上位石材を据えるための根固めと考えられる。このためこの部分をもって本遺構の隅角部技法を検討することは慎重を期さねばならないが、石材を見る限り、角石と築石部との差は見いだせない。

次に石垣背面の根切り作業であるが、基本的に斜面をＬ字状にカットし根石を据える平坦面を確保する。カットの背面は１ｍ前後の高さでほぼ直に加工するが、さらに上位の法面は部分的に凹凸を切り盛りするものの、全体的には表土を残しており、旧地形を残した状態となる。また、根切り面の前面には特に作業面を確保した形跡はなく、根切り作業は根石の掛付け面確保のみを目的として行われている。

以上をまとめると石垣は天正期段階を超えるものではないと判断でき、土器や瓦の年代からは天正８年～10年代前半のものと考えるのが妥当であろう。この時期までの宍粟郡の領主は天正８年の宇野氏滅亡後は神子田正治と、天正12年入封の黒田孝高である（天正15年に中津に移封）。石垣はこの前後に構築された可能性が高い。礎を使用した段階を火災による被熱痕跡とするなら、この段階が宇野氏となり、直後に石垣が築かれたとすれば神子田正治期が礎の段階となる。ただし、瓦の文様の後出性を見るなら黒田氏段階も無視はできない。

５．兵庫県下の織豊系城郭

兵庫県下において天正８年から慶長５年の期間に築かれたと考えられる城郭は20城（第19図）である。播磨では姫路城・龍野城・高砂城・三木城・船上城そして宇野構（本項では居館名としてこの呼称を用いる）、摂津では兵庫城・三田城、丹波では黒井城・八上城・岩尾城・金山城、但馬では有子山城・豊岡城・八木城・生野城・竹田城、淡路では洲本城・志知城・叶堂城がある。このように播磨では６城があるが、内陸部や山間部に少なく、姫路以東に多く存在する。これに対して、摂津では大坂近辺が空白になる。一方、丹波では４城（兵庫丹波のみ）、但馬では５城と比較的多い。つまり県下の織豊系城郭は豊臣政権の中心地で少なく、外縁部に比較的多いといえるのである。

これらの城郭は丹波の金山城（丹波市・篠山市）を除くと領国支配の拠点となるもので占められるが、部分的な改修や中心部のみに石垣を築いたものが多い。この点について早川圭氏は「近畿の織豊系城郭

の多くは」、「不完全な形態が多く、典型的な織豊系城郭の成立は遅い？」、そして「枡形・櫓台・総石垣」などの要素が出そろった城郭はほとんど認められないという（早川圭2012）。

これに対して統一政権が築城した大坂城・聚楽第では、大規模で総石垣をもつ典型的な遺構が構築され、県下の織豊系城郭と比べ格差が大きい。この点で、織豊政権における築城はのちの近世城郭と異なり、築城主体による格差が大きく家臣大名や、中小大名の城郭では規模や内容が抑制される傾向が著しい。

ただし、県内でも播磨の姫路城は例外的に相当規模の石垣をもつ城郭に改修された可能性が高い。姫山の広範囲に織豊期の石垣が残され、ほぼ近世池田期の範囲に重なることが知られている。（姫路市教委2008）つまり、姫路城のみは政権の中心城郭に準じる城郭であり、蔵入地であった播磨の拠点として重要視されたことが遺構から明らかにされているのである。

織豊系城郭と宇野構

県下の織豊系城郭を見てきたが、最後に宇野構を検討しその評価を考えてみたい。なお、ここでは織豊系城郭の指標として、石垣を中心に考えることとした。ただし、姫路城については前述のとおり一般的な城郭とは異なるので除外した。その上で県下の織豊系城郭を見ると山城が中心となるので、これを基準にまず事例を分類する。

1類型は石垣の構築範囲が山頂城全体におよぶものである。黒井城・有子山城などであるが、背面には石垣が巡らない事例が多い。ただし例外的に竹田城がある。2類型は詰の丸・天守周辺のみを石垣とするもので、龍野城・八木城・岩尾城・豊岡城などがある。これらは山城の象徴的な部分のみを改修する。一方で豊岡城・八木城事例などをみると山麓居館に比重が置かれることが推測される。3類型は中世城郭の一部に石垣を付加する、金山城・八上城・生野城などの事例である。郭そのものを大きく改変することはなく、既存の郭構造の法面や虎口に石垣が付加される。4類型は、そもそも石垣を構築せず、中世城郭の構造のまま織豊期の城郭として存続する事例である。播磨の三木城・三田城、淡路の志知城（ただし、詳細は不明）などである。三木城は石垣が使用されず、瓦も、コビキBは出土せず天正期前半のものであるため、未使用と推定される。（三木市教委2010）三田城では瓦は使用するが、石垣は築かれない。志知城では石垣は不使用で、瓦は不明である。（ただし、石垣石材は後年築かれる叶堂城に転用された伝承が残る。）4類型の三木城・三田城は湯の山街道に近い内陸部にあるが、一方で近くの湯の山御殿（神戸市北区）は太閤の湯として知られ秀吉が湯治に訪れた温泉施設であるが、城郭石垣が築かれる。これをみると内陸部の三木城や三田城は防御施設構築の優先度が低いまま、拠点として維持されたようである。以上、山城を中心に類型を検討したが、多くが中世城郭の規模に比べ限定的な改修にとどまることが確認できた。

第20図　宇野構遺跡から殿町を望む（北から）

一方でこれらの山城には山麓に居館が築かれる事例が多い。豊岡城・出石城・竹田城・生野城など但馬の城郭では発掘調査によって豊臣期後半段階（文禄～慶長頃）に石垣を伴う居館が構築されたことが明らかになっている。さらに、同時期の有子山城ではのちの出石城の前身となる山麓の城郭石垣が検出されるなど、少なくとも文禄～慶長期には居館においても織豊系城郭への改修が多くの城郭で進められていたことがわかる。これに対して今回の宇野構における石垣遺構の検出は、豊臣期前半であり、天正

期段階における山麓居館の織豊系城郭への改修事例である点が注目される。近年調査が進められている兵庫城において、天正期の平城について石垣の構築が明らかになりつつあるが（神戸市教委2014）、これは政権の城郭政策のもとで築城された事例であり、宇野構のような家臣大名あるいは奉行層の城郭とは異なる。このクラスの事例については播磨の竜野城、丹波の八上城・黒井城・岩尾城などが天正期に居館を改修した可能性があるが、現在のところ未調査のため実態は不明である。従って、宇野構で検出された石垣は、天正８～10年代半ば頃の織豊系城郭への改修事例としては県下では唯一のものであり、豊臣蔵入地における豊臣系大名の拠点形成を知るうえで貴重な調査成果といえる。宇野氏段階で詰城機能を担った長水城址は後世の破壊によって、主郭周辺の旧状を知ることができない。ただ、現状遺構を見る限り、織豊期に石垣が構築されたとしても、可能性としては主郭以外には残されていないので、第２・３類型などの部分的な改修に留まったことが確実である。この意味では宇野構も山城・居館を含めて他の織豊系城郭事例に通底する様相をもっていたことは疑いがない。

一方、篭の居館では居館背後の丘陵地形を生かして石垣と櫓を構築し城郭化を計る。おそらく前代の姿を一新したものであろうが、主郭の場所や背後の丘陵に詰城的な機能を持たせる点については、視覚的な相違はあっても本質的な構造は宇野氏段階と変化がなかったと思われる。この意味で豊臣前期の織豊系城郭化は家臣大名の場合、前代を大きく否定するものではなく、むしろ踏襲しつつ石垣などの個別要素を変更することに主眼が置かれたものと考えられる。

第21図　雪の伊水小学校と現場（北から）

引用文献

北垣聰一郎1987『石垣普請』

堀口健弐2002「城郭石垣の様式と編年」『中世城郭研究論集』村田修三編

田中幸夫2004『播磨の中世瓦』

小林基伸2006「播磨の破城令について」『播磨置塩城跡発掘調査報告書』

小林基伸2006「赤松氏の権力と拠点」『大手前大学史学研究所紀要　第6号』

姫路市教育委員会2008『特別史跡姫城跡石垣総合調査報告書』

三木市教育委員会2010『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』

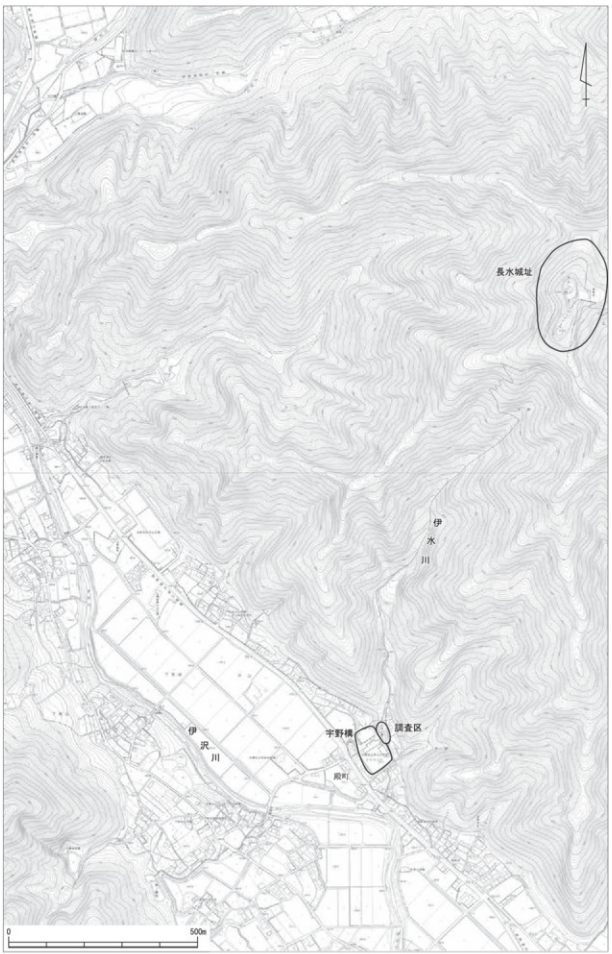
早川圭2011「近畿地方における織豊系城郭の支城」『織豊系城郭の支城』織豊期城郭研究会

工藤茂博2012「英賀城」『姫路市城郭研究室年報』Vo21　姫路市教育委員会

神戸市教育委員会2014「兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書」

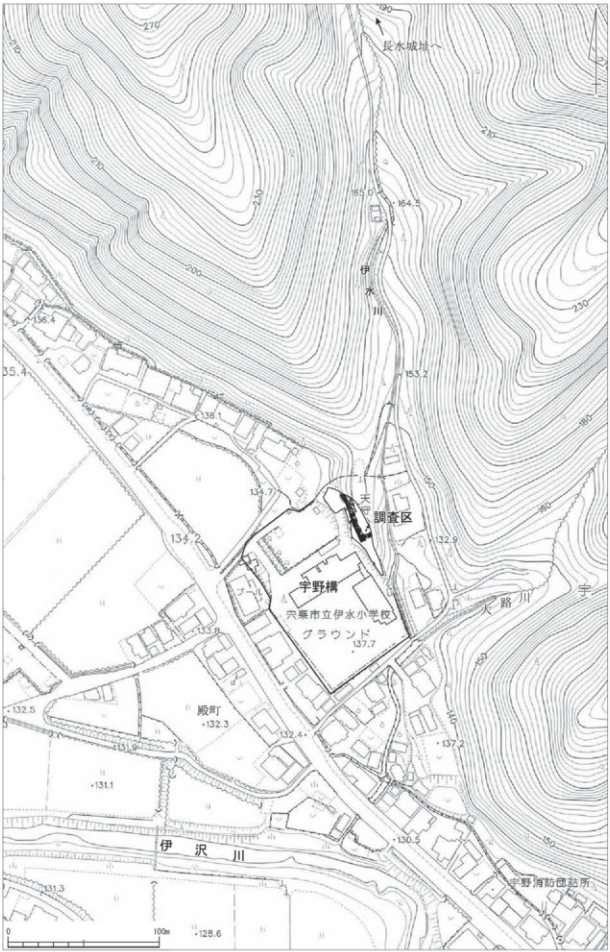
宍粟市教育委員会2014『播磨国宍粟郡広瀬宇野氏の史料と研究』

図　　版

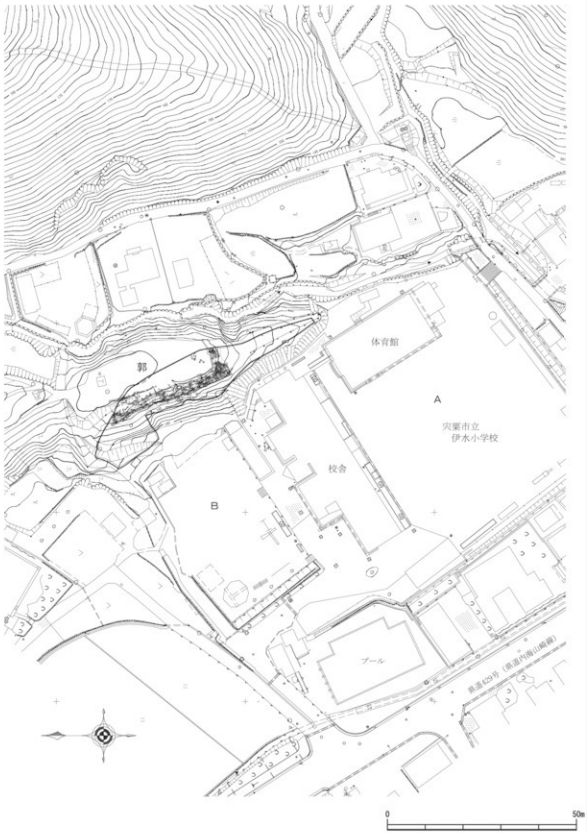


長水城址と宇野構遺跡

図版2

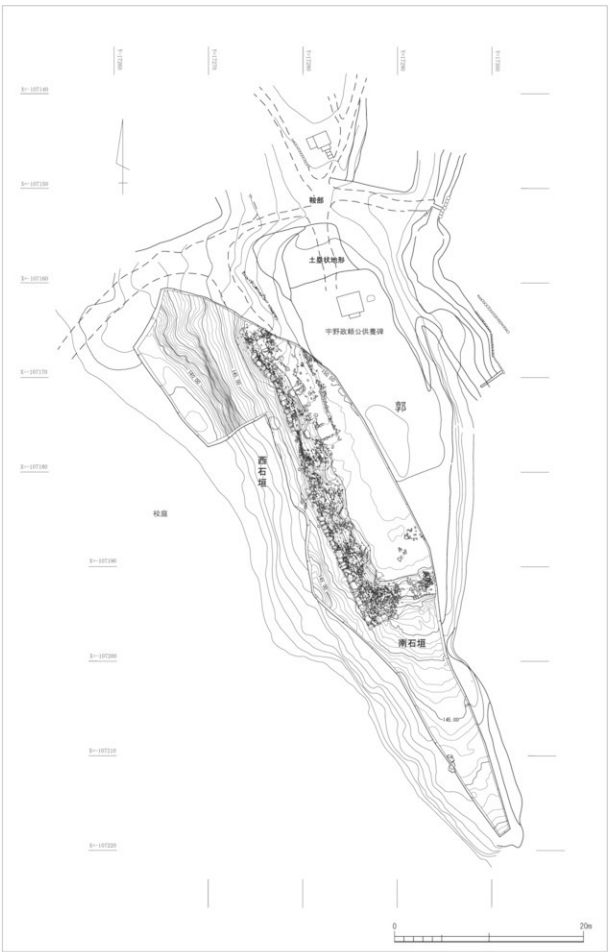


宇野構遺跡と殿町



宇野構遺跡全体図

図版4



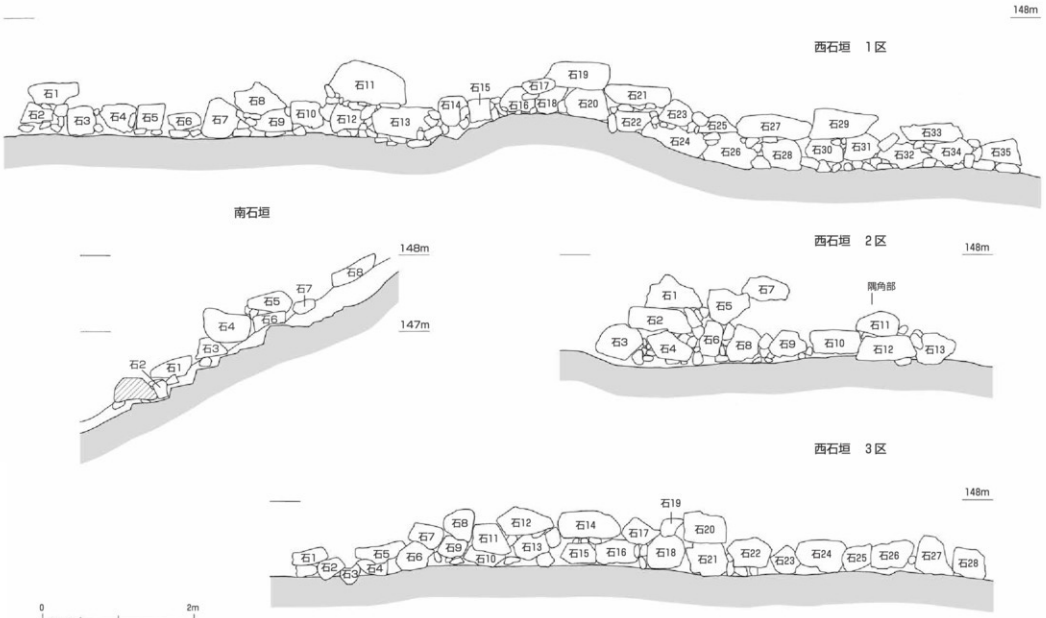
調査区地形測量図

X=-107160
X=-107170
X=-107180
X=-107190
X=-107200
X=-107210
Y=-112270
Y=-112260
Y=-112250
Y=-112240
北区
3区
2区
1区
西石垣
南石垣
郭
146.00
145.00
0
10m

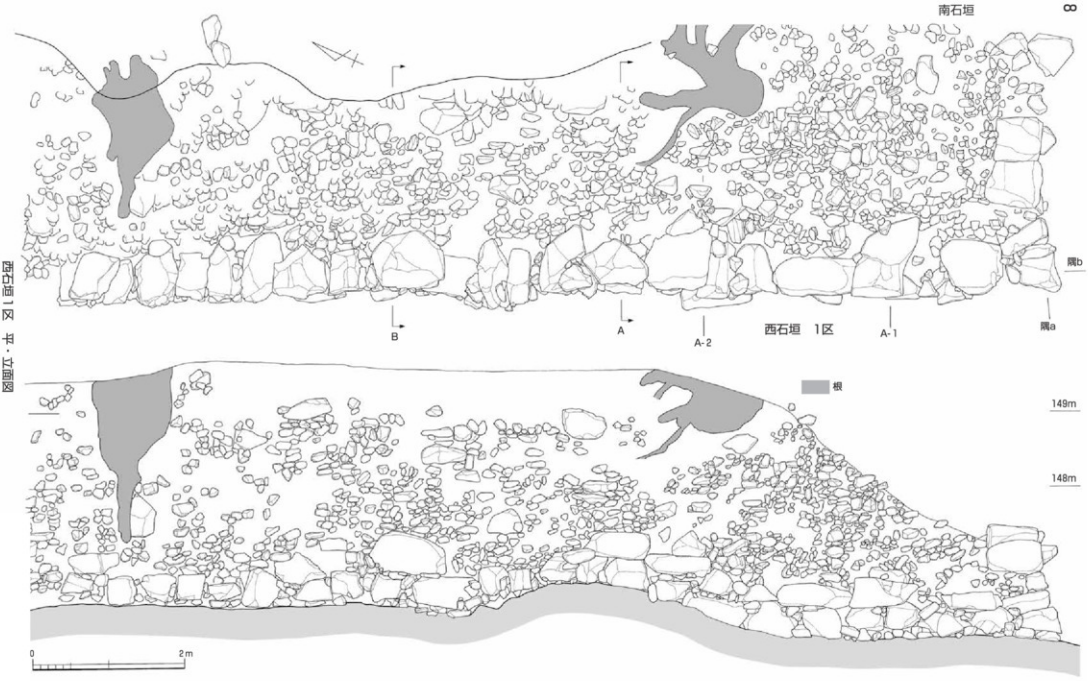
調査区全体図

断面G
断面F
3区
断面E
断面D
2区
西
石
垣
断面C
郭
断面B
1区
断面A
南断面
東断面
断面A-2
断面A-1
隅角a
隅角b
断面B
断面A
南石垣
0
10m

石垣平面図


西石垣 1区
148m
石1
石2
石3
石4
石5
石6
石7
石8
石9
石10
石11
石12
石13
石14
石15
石16
石17
石18
石19
石20
石21
石22
石23
石24
石25
石26
石27
石28
石29
石30
石31
石32
石33
石34
石35
南石垣
148m
147m
石1
石2
石3
石4
石5
石6
石7
石8
西石垣 2区
148m
隅角部
石1
石2
石3
石4
石5
石6
石7
石8
石9
石10
石11
石12
石13
西石垣 3区
148m
石1
石2
石3
石4
石5
石6
石7
石8
石9
石10
石11
石12
石13
石14
石15
石16
石17
石18
石19
石20
石21
石22
石23
石24
石25
石26
石27
石28
0
2m

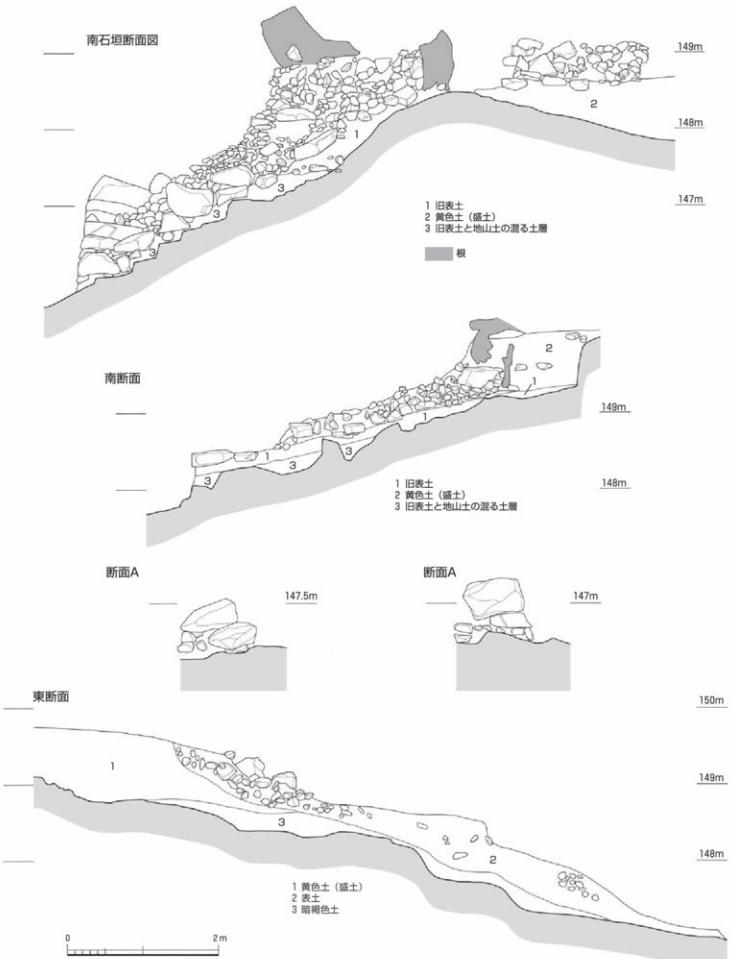
図版8



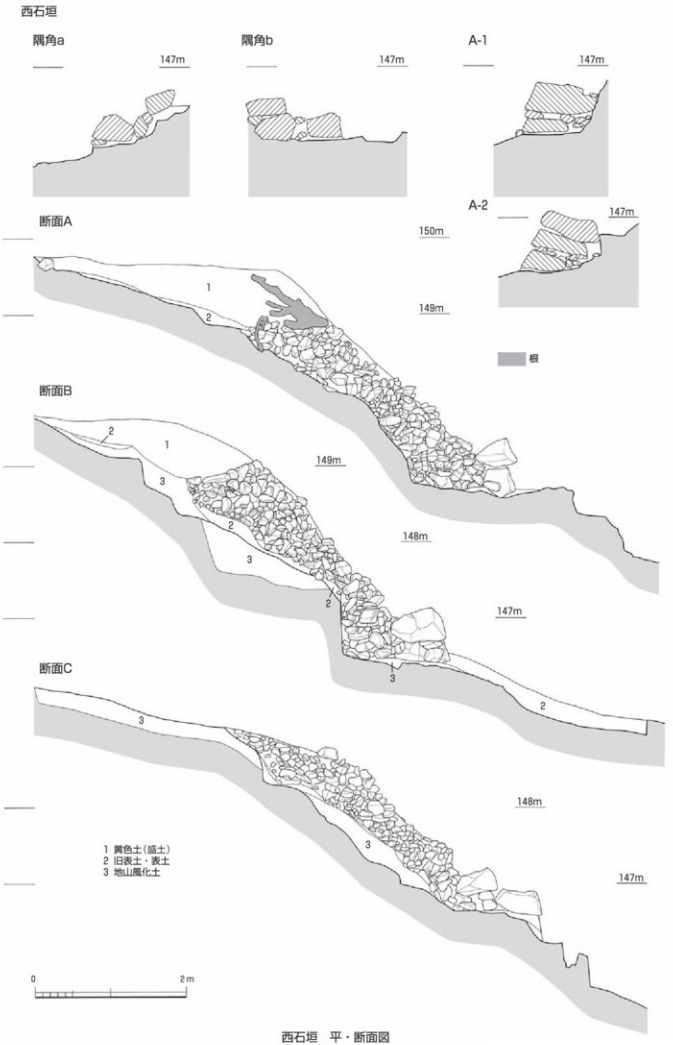
西石垣1区　平・立面図

西石垣 2 区　平・立面図

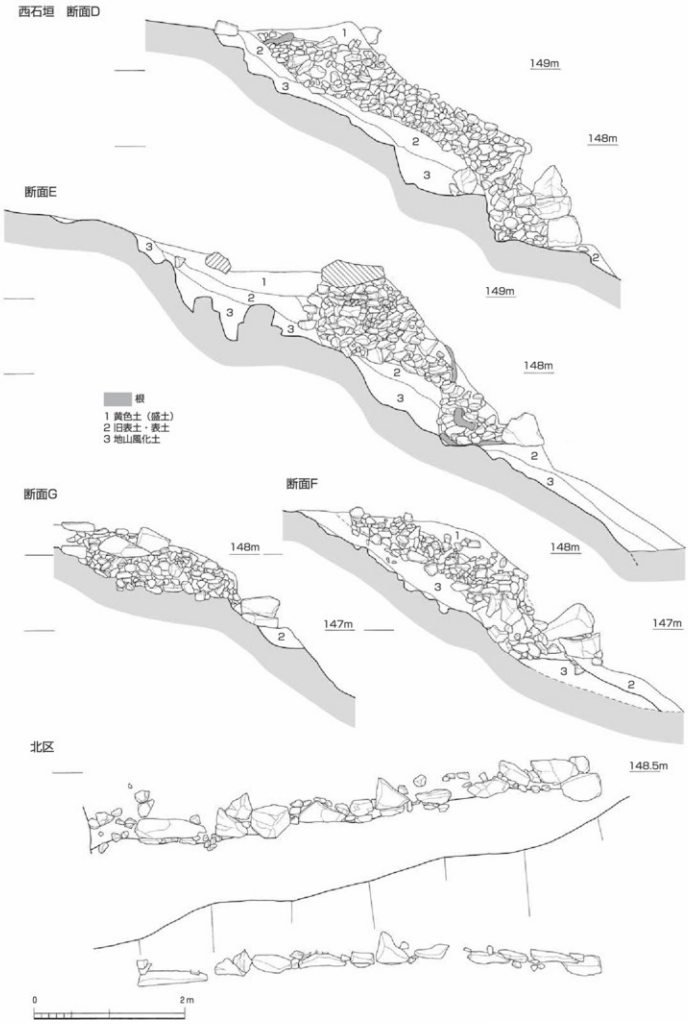
西石垣3区　平・立面図


南石垣断面図
149m
148m
147m
1
2
3
1 旧表土
2 黄色土（盛土）
3 旧表土と地山土の混る土層
根
南断面
149m
148m
1 旧表土
2 黄色土（盛土）
3 旧表土と地山土の混る土層
断面A
147.5m
断面A
147m
東断面
150m
149m
148m
1 黄色土（盛土）
2 表土
3 暗褐色土
0
2m

南・西石垣　断面図

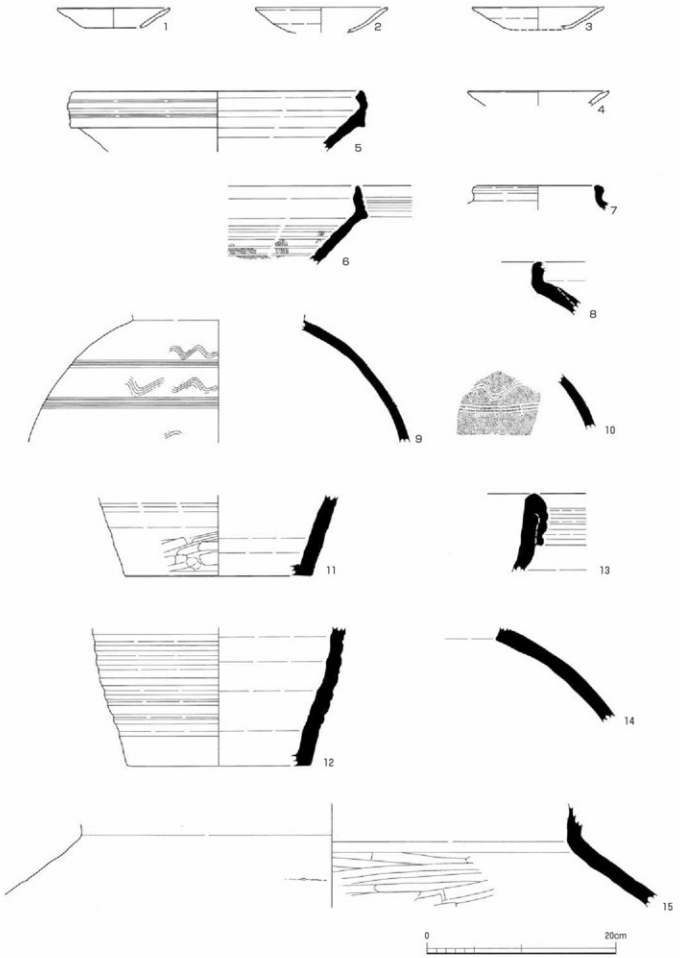

西石垣
隅角a
147m
隅角b
147m
A-1
147m
A-2
147m
断面A
150m
149m
1
2
根
断面B
2
1
149m
3
2
148m
3
2
147m
3
断面C
3
2
148m
3
147m
1 黄色土(盛土)
2 旧表土・表土
3 地山風化土
0
2m

西石垣　平・断面図

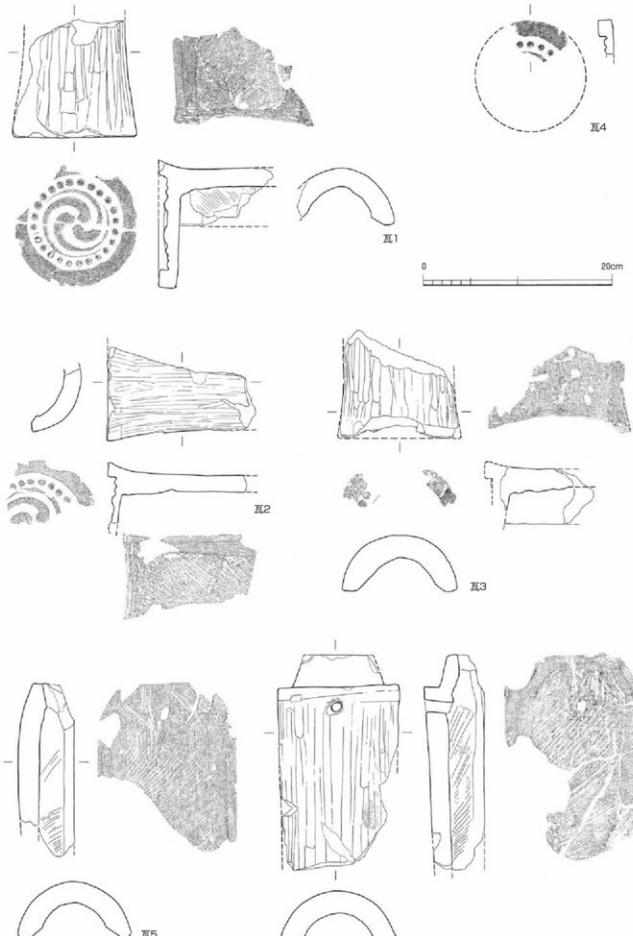

西石垣　断面D
149m
148m
断面E
149m
148m
根
1 黄色土（盛土）
2 旧表土・表土
3 地山風化土
断面G
148m
147m
断面F
148m
147m
北区
148.5m
0
2m

西石垣　平・断面図

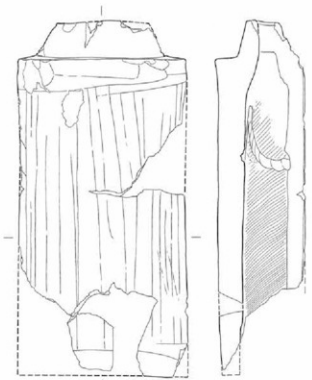
図版14



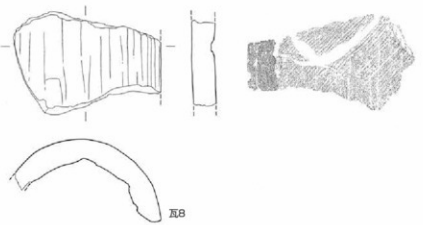
出土土器



出土瓦1

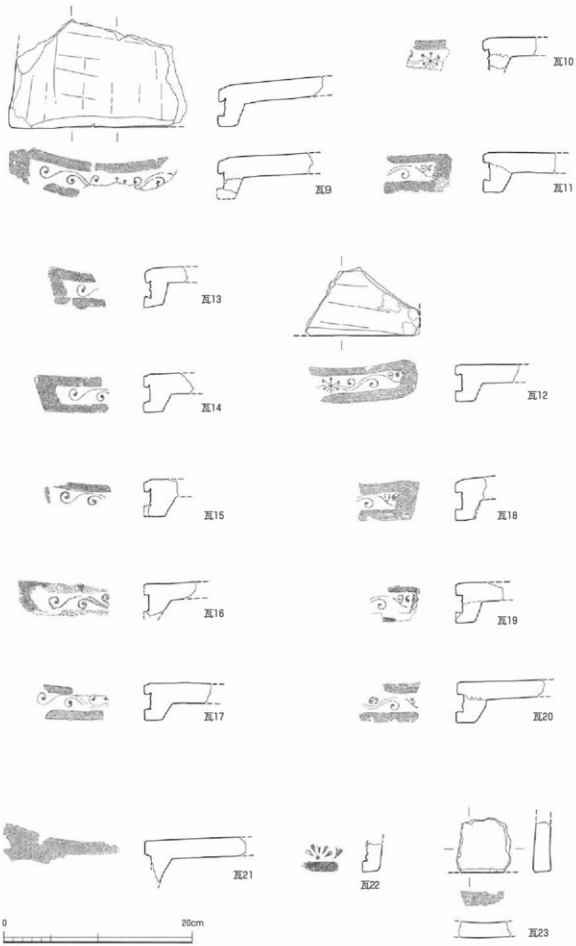


瓦7

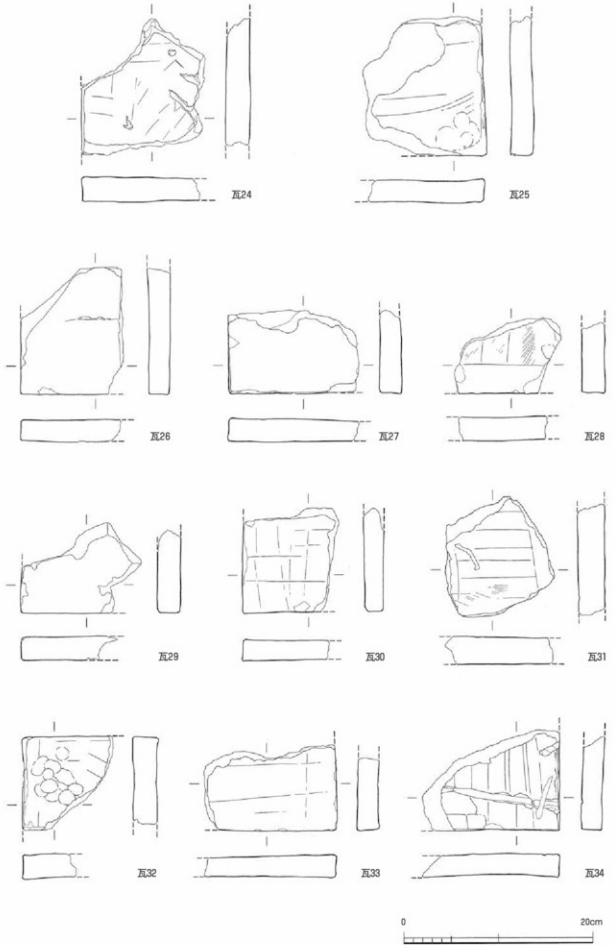


瓦8

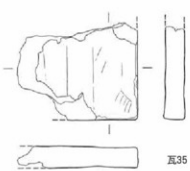
0 20cm

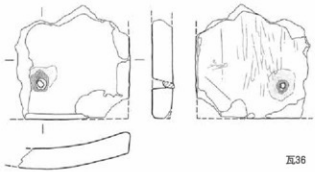


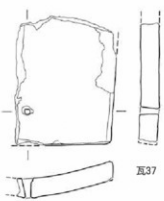
出土瓦3

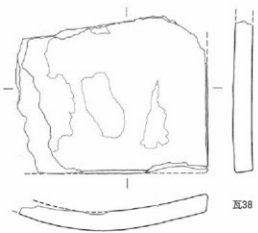


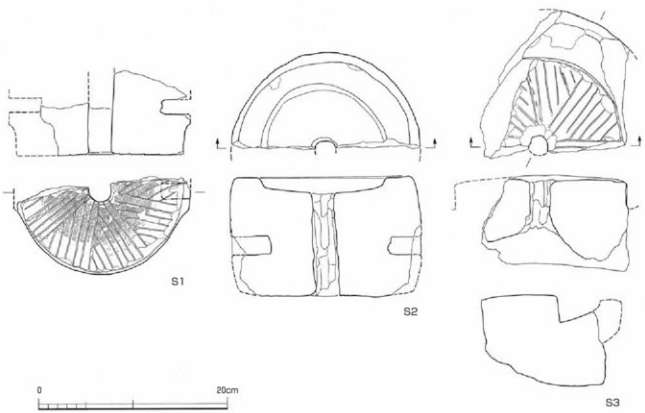
出土碑

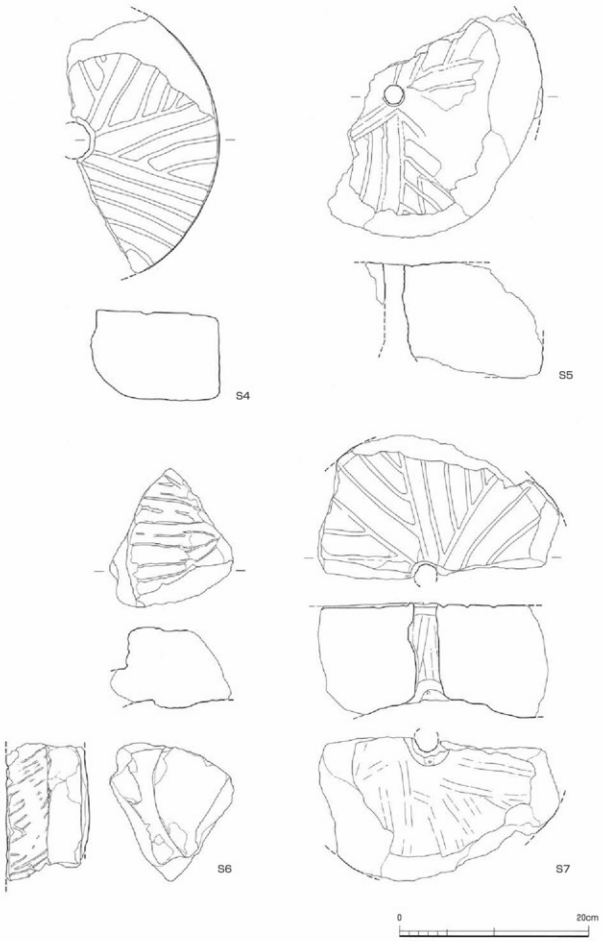

瓦35


瓦36


瓦37


瓦38





出土石製品2

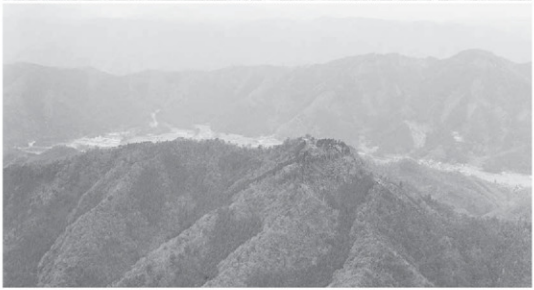
写真図版

城跡遠景（南から）

城跡全景（北西から）

写真図版2　遺跡遠景

広瀬（南から）



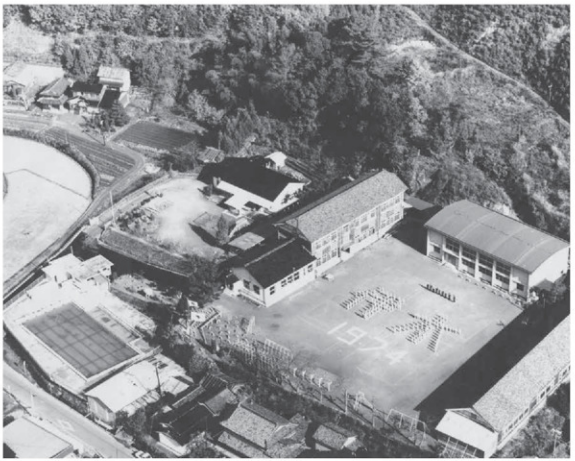
長水城址（南西から）

長水城址全景（東から）

宇野構遺跡全景（南西から）

調査区全景（西から）

昭和12年の小学校（南東から・伊水小学校蔵、当時は鳥澤尋常高等小学校）



昭和49年の小学校（南西から・伊水小学校蔵）

写真図版6　調査区近景

調査区全景（南西から）

郭全景（南から）

郭全景（北から）

調査区全景（西から）

石垣全景（北西から）

調査区全景（南から）

写真図版8　石垣検出状況

南石垣（南から）

西石垣1・2区（西から）

西石垣2・3区（西から）

西石垣3区（西から）

西石垣 1 区　石29～35

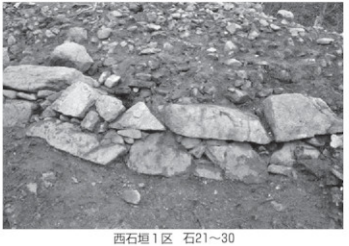
西石垣細部（南西から）

西石垣細部（北西から）

西石垣 1 区　石1～7

西石垣 1 区　石7～15

西石垣 1 区　石15～22


西石垣 1 区　石21～30

西石垣（近代以降）

写真図版10　石垣石材及び石垣構築状況1

西石垣2区 石1～9(西から)

西石垣2区 石10～13(西から)

西石垣2区 石10～13入角(西北から)

西石垣2区 石5～10(西から)

西石垣北区(西から)

西石垣3区(北から)

西石垣3区 石1～8

西石垣3区 石6～16

西石垣3区　石14～25(西から)

西石垣3区　石23～28(西から)

西・南石垣隅角部(南から)

西石垣南側(南から)

西石垣1区(北から)

西石垣2区(東から)

西石垣3区(東から)

西石垣3区(南から)

写真図版12　石垣背面・グリ石状況

グリ石

グリ石

グリ石巨石

グリ石巨石

グリ石検出状況

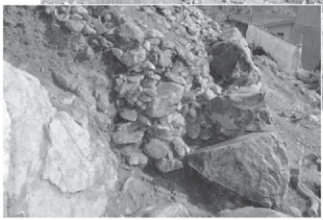
石臼（S5）出土

石臼（S7）出土

石臼（S2）出土

断面A

断面B



断面B細部

写真図版14　石垣断面 2

断面C

断面D

断面D細部

断面E

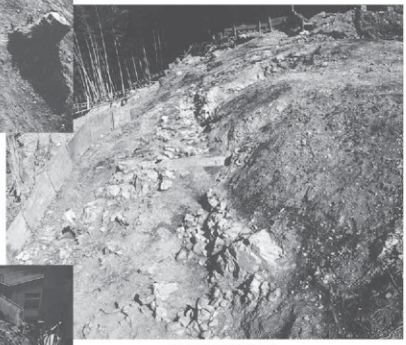
断面E細部

断面F

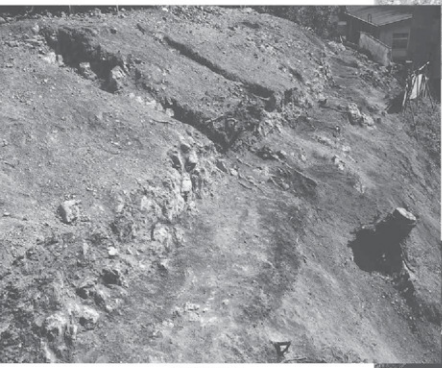
断面G

写真図版16　石垣根切り痕跡

築石除去後（北から）

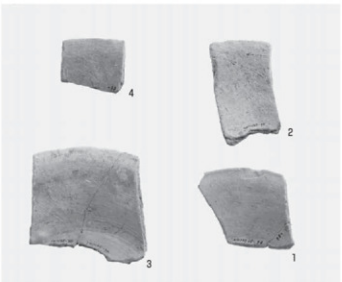


築石除去後（南から）

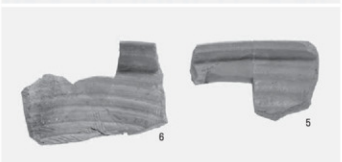


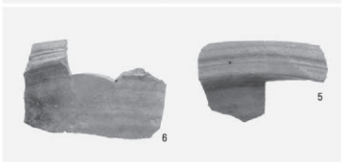
完掘（北から）

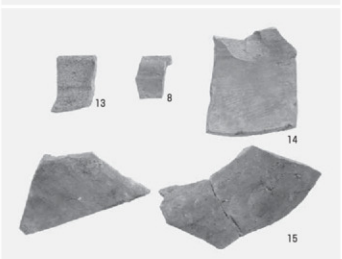
完掘（南から）

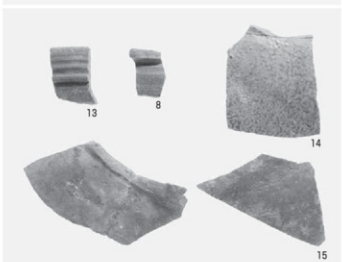

4
2
3
1

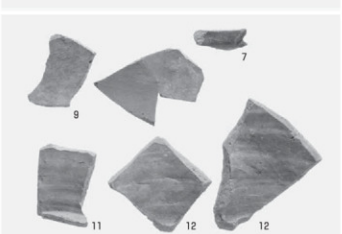
4
2
3
1

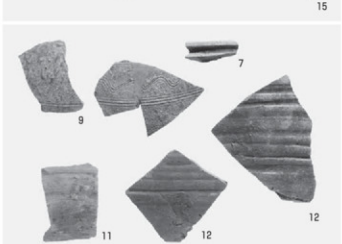

6
5


6
5


13
8
14
15


13
8
14
15


7
9
11
12
12


7
9
12
11
12

瓦1

瓦2

瓦3

瓦4

瓦5　瓦6

瓦7

瓦9

瓦10

瓦11

瓦13

瓦12

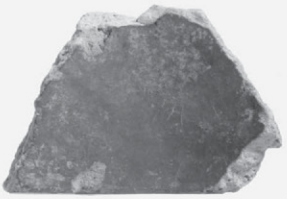
瓦18

瓦14

瓦19

瓦15

瓦16



瓦21

瓦17

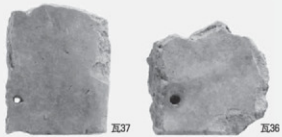
瓦20

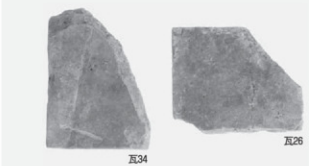
瓦22

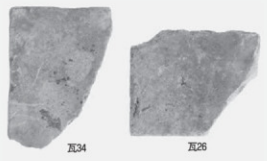
瓦38

アカニシ貝

№37
№36


№37
№36


№34
№26
№24
№35


№34
№26
№24
№35

№27
№30
№33
№25

№27
№30
№33
№25

S1

S2

S3

S4

S5

S6

S7

報告書抄録

ふりがな	うのがまえいせき
書名	宇野構遺跡
副書名	(砂)長水川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第４７７冊
編著者名	菱田淳子・山上雅弘
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内） ℡079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号 ℡078－362－3784
発行年月日	平成２７(2015)年３月３１日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　℡079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
宇野構遺跡	宍粟市山崎町	28227		35°03'38"	134°52'27"	20121220 ～20130325 (2012145)	569㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇野構遺跡	城館	戦国時代～織豊時代	石垣	土師器皿・備前焼壺・甕・擂鉢、軒丸瓦・軒平瓦・磚、石臼・茶臼	

要約

宍粟郡を支配した播磨の有力国人宇野氏の居館とされた遺跡を調査。調査の結果、これまで知られていなかった宇野氏滅亡以後の城郭遺構を検出。特に検出された石垣遺構は織豊期の石垣であり、貴重な発見となった。石垣は下端部のみではあるが長さ35mにわたって残されており、この時期の石垣遺構を考えるうえで重要である。また、磚の出土は石垣上に磚を伴う櫓の存在を推測させるものである。一方、宇野氏段階については石垣裏込めの表土下から16世紀後半の土師器が出土しており、石垣構築以前に居館が存在したことをわずかに傍証することができた。

兵庫県文化財調査報告　第477冊

宍粟市

宇野構遺跡

—(砂)長水川通常砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成27(2015)年3月31日　発行

編　集　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
（兵庫県立考古博物館内）

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　株式会社吉本宝文堂
〒675-1343　兵庫県小野市来住町883-2